

統計思考力育成事業
統計数理研究所 公開講演会(2015.11.05)

変わる 変わらない

調査から見る日本人の国民性・意識・格差

変わる日本人の国民性
～コウホート分析から見る戦後社会の変化～

中 村 隆

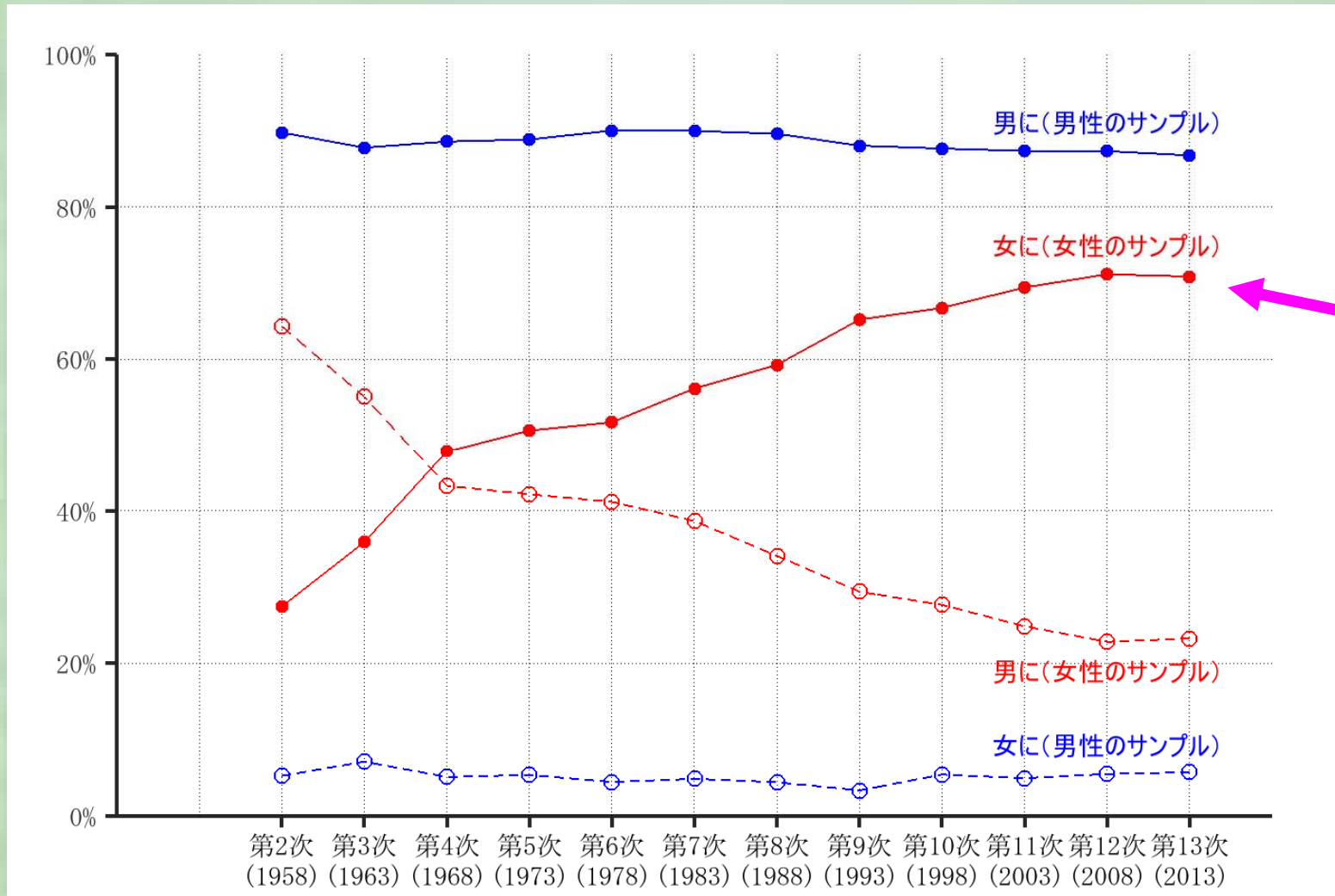
情報・システム研究機構

統計数理研究所

データ科学研究系／調査科学研究センター

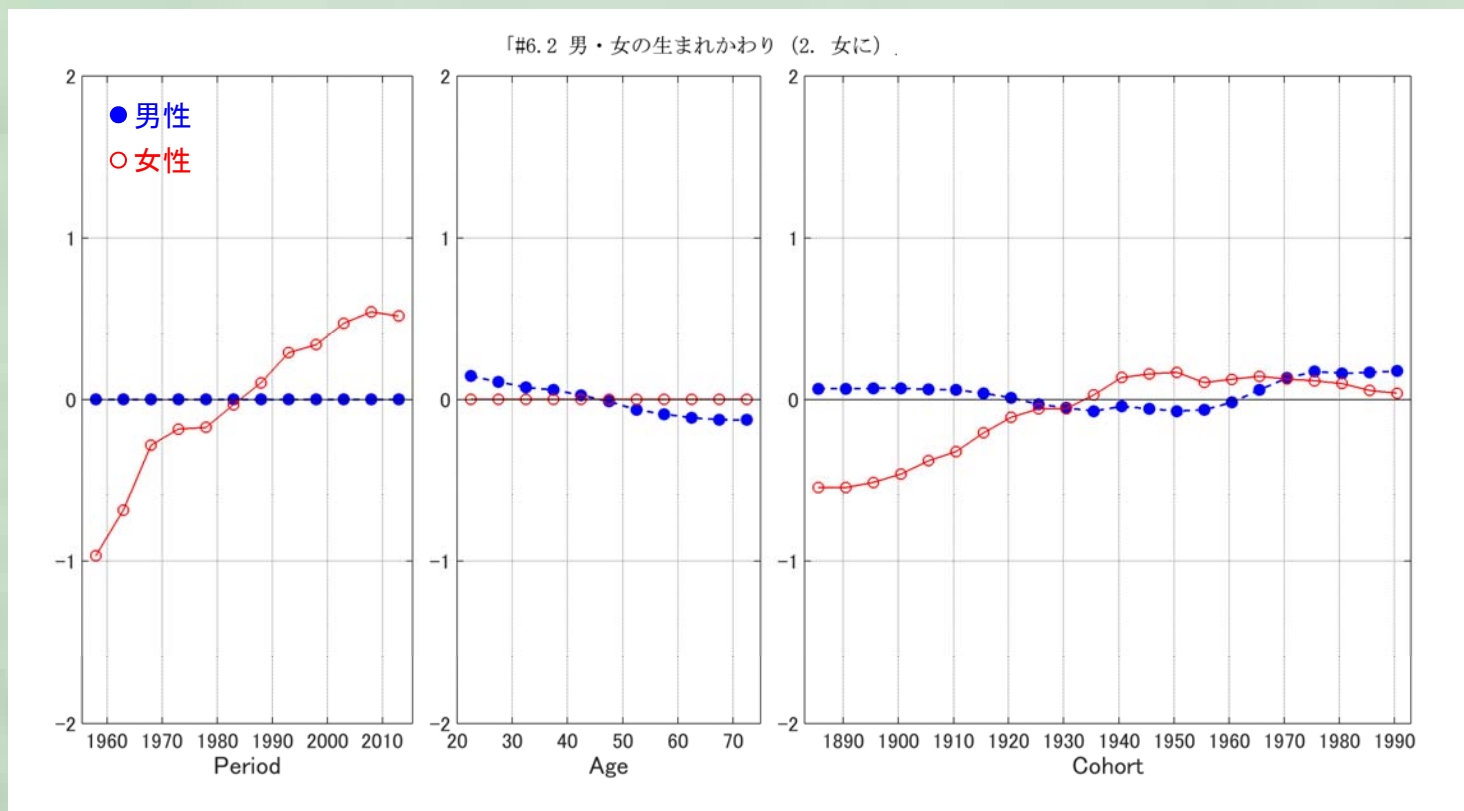
#6.2 男・女の生まれかわり

‘#6.2 男・女の生まれかわり’の推移



#6.2 男・女の生まれかわり(女に)

- 女性の‘女に’は，第一に時代効果
- 女性は，1940年代生まれ以降の世代効果でやや下降傾向
- 男性は割合としての変化は小さいが，年齢・世代効果が



本日の話の内容

- I. 男・女の生まれかわり
- II. コウホート分析とは
- III. 共通言語化－鶴岡言語調査
- IV. 日本人の齲蝕－歯科疾患実態調査
- V. 日本人の自殺－人口動態統計
- VI. 日本人の国民性調査

II. コウホート分析 とは

コウホートとは

- コウホート (cohort)
 - 古代ローマの軍団の単位, 一団の兵士・歩兵
 - 仲間・同士・同輩・同僚, 群れ・集団
 - 人口統計学:
 - 一定の地域, 一定の時期に人生における重大な出来事(出生・就職・結婚)を体験した人びと
 - 医学・疫学:
 - 一定の期間に観察対象者となった人びと(コホート研究)
- 以下では, 「同時出生集団 (birth cohort)」「世代」

コウホート分析

- 継続調査データの分析法
- 複数の調査時点のデータを, コウホート(同時出生集団, 世代)の視点を導入して分析する
- コウホート表(年齢階層 × 調査時点別の集計表)データから次の効果を分離する
 - 年齢効果(加齢の影響)
 - 時代効果(調査時点の時勢の影響)
 - コウホート(世代)効果(世代による違い)
 - 年齢 × 時代の交互作用効果(時代ごとに影響の受ける年齢層が異なる)
- 識別問題の存在
 - 3効果(年齢・時代・コウホート効果)間の識別不能性

各効果のあり方と社会の変化

	個人	社会
年齢効果	変化	変化しない (ただし、年齢別人口構成の影響)
コウホート(世代)効果	変化しない	変化 (世代交代によりゆるやかに)
時代効果	変化	変化

- 時代の影響 → 時代効果
 - その時々^の社会の全成員が受けた影響
- 時代の影響 → 年齢 × 時代の交互作用効果
 - ある年齢層がより敏感に反応
- 時代の影響 → コウホート(世代)効果
 - 若齢で影響を受け、その影響が特定の世代に固定

コウホートモデル

- ロジット・コウホートモデル (割合のデータのための)

$$\eta_{ij} \equiv \log[\pi_{ij} / (1 - \pi_{ij})] = \beta^G + \beta_i^A + \beta_j^P + \beta_k^C + \beta_{ij}^{AP}$$

π_{ij} : 第 i 年齢区分, 第 j 調査年の母集団割合

β^G : 総平均効果 (grand mean)

β_i^A : 年齢効果 ($i = 1, \dots, I$)

β_j^P : 時代効果 ($j = 1, \dots, J$)

β_k^C : コウホート効果 ($k = 1, \dots, K$)

β_{ij}^{AP} : 交互作用効果 ($i = 1, \dots, I; j = 1, \dots, J$)

– 標準コウホート表の場合 (年齢区分幅と調査間隔が一致)

$$k = j - i + I$$

$$K = I + J - 1$$

ベイズ型コウホートモデル

- パラメータの漸進的変化の条件

$$\begin{aligned} & \frac{1}{\sigma_A^2} \sum_{i=1}^{I-1} (\beta_{i+1}^A - \beta_i^A)^2 + \frac{1}{\sigma_P^2} \sum_{j=1}^{J-1} (\beta_{j+1}^P - \beta_j^P)^2 + \frac{1}{\sigma_C^2} \sum_{k=1}^{K-1} (\beta_{k+1}^C - \beta_k^C)^2 \\ & + \frac{1}{\sigma_{AP}^2} \sum_{j=1}^{J-1} \sum_{i=1}^{I-1} \{(\beta_{i+1,j+1}^{AP} - \beta_{i,j+1}^{AP}) - (\beta_{i+1,j}^{AP} - \beta_{ij}^{AP})\}^2 \rightarrow \text{small} \end{aligned}$$

- 赤池ベイズ型情報量規準 (ABIC) 最小化法

$$\text{ABIC}(\sigma) = -2 \log \int f(\boldsymbol{\beta} | \mathbf{y}) \cdot \pi(\boldsymbol{\beta}_* | \sigma) d\boldsymbol{\beta}_* + 2h$$

III. 共通言語化

— 鶴岡言語調査 —

CONCEPT ANALYSIS

- それでは、今からことばのことについてお尋ねします。まず、カードを見て、何が書かれているかお答えください。

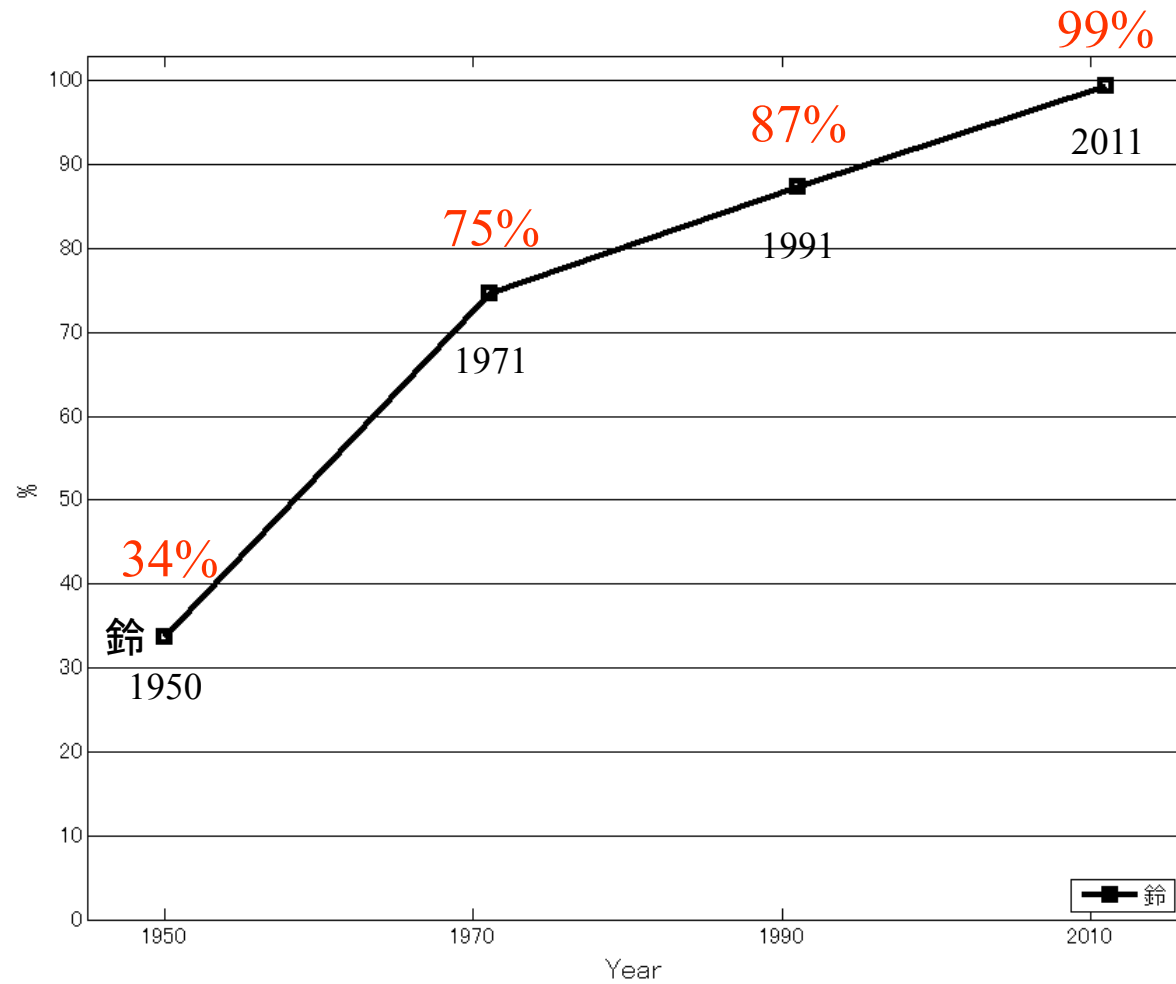
211



CONCEPT ANALYSIS

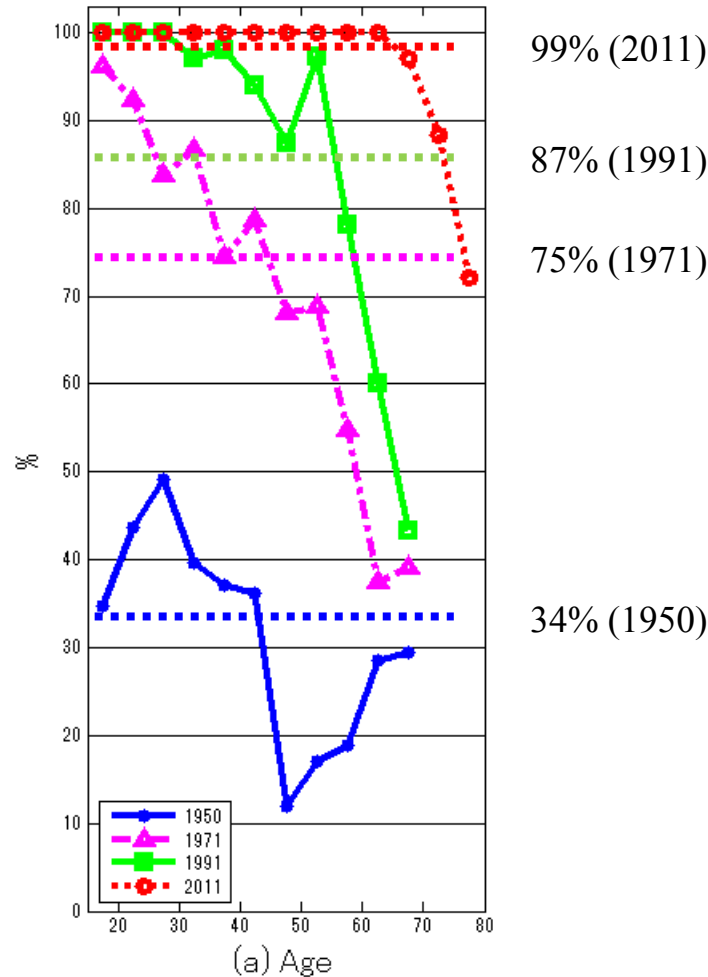
- 共通語化
- コウホート効果（世代差）はあるだろう
 - 世代交代による社会全体の変化
- 時代効果もあるだろう
 - 年齢や世代を問わない個人の変化
- 年齢効果はあるのか？
 - 加齢に伴って個人は変わるのか
 - 変わるとすれば、共通語を使うようになるのかならないのか

「鈴(スズ)」の共通語率の変化



「鈴(スズ)」の年齢別の変化

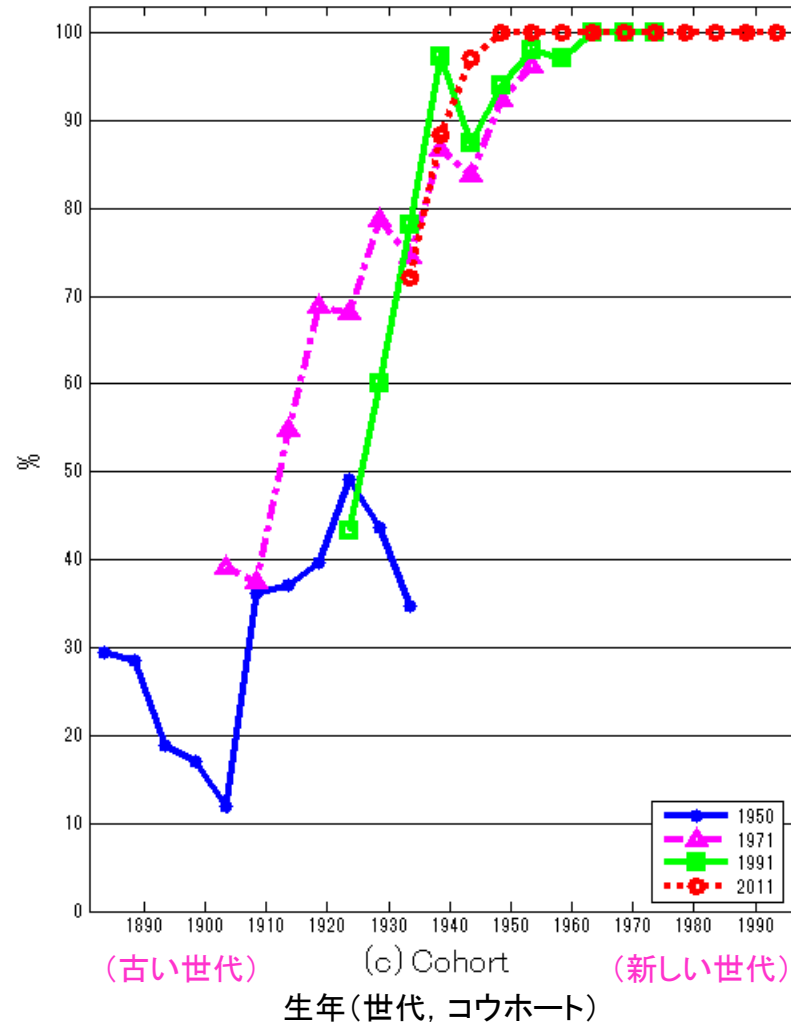
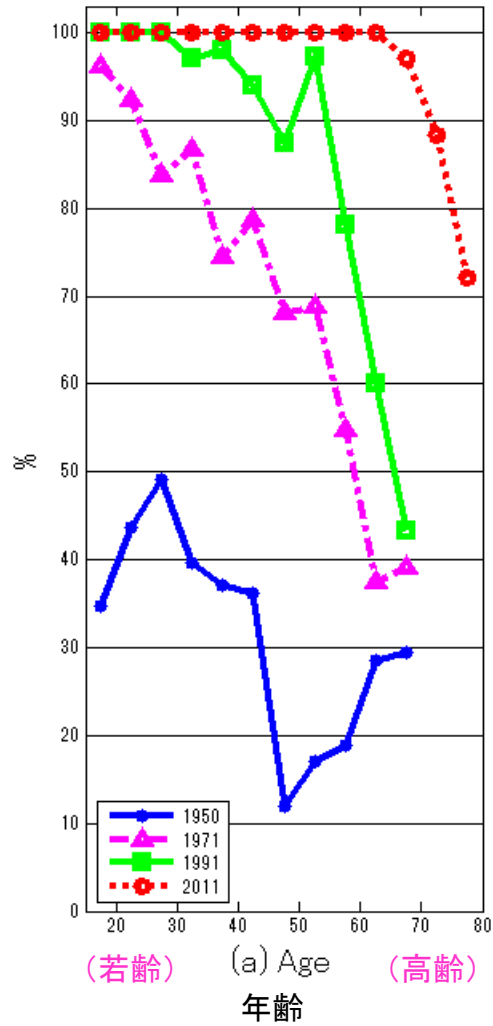
W211: 共通語率[非鼻音][211] 鈴(スズ)



- 全体として、共通語率は上昇
- 各時点では、年齢が高いほど、共通語率が低い傾向
- 継続調査で、年齢別のデータがあるとき
 - 時勢による変化,
 - 加齢による変化,
 - そして、世代差があるかを見る

「鈴(スズ)」の年齢・世代別の変化

W211: 共通語率【非鼻音】[211] 鈴(スズ)





国語研・定点経年調査
のHPより

1. 鶴岡調査

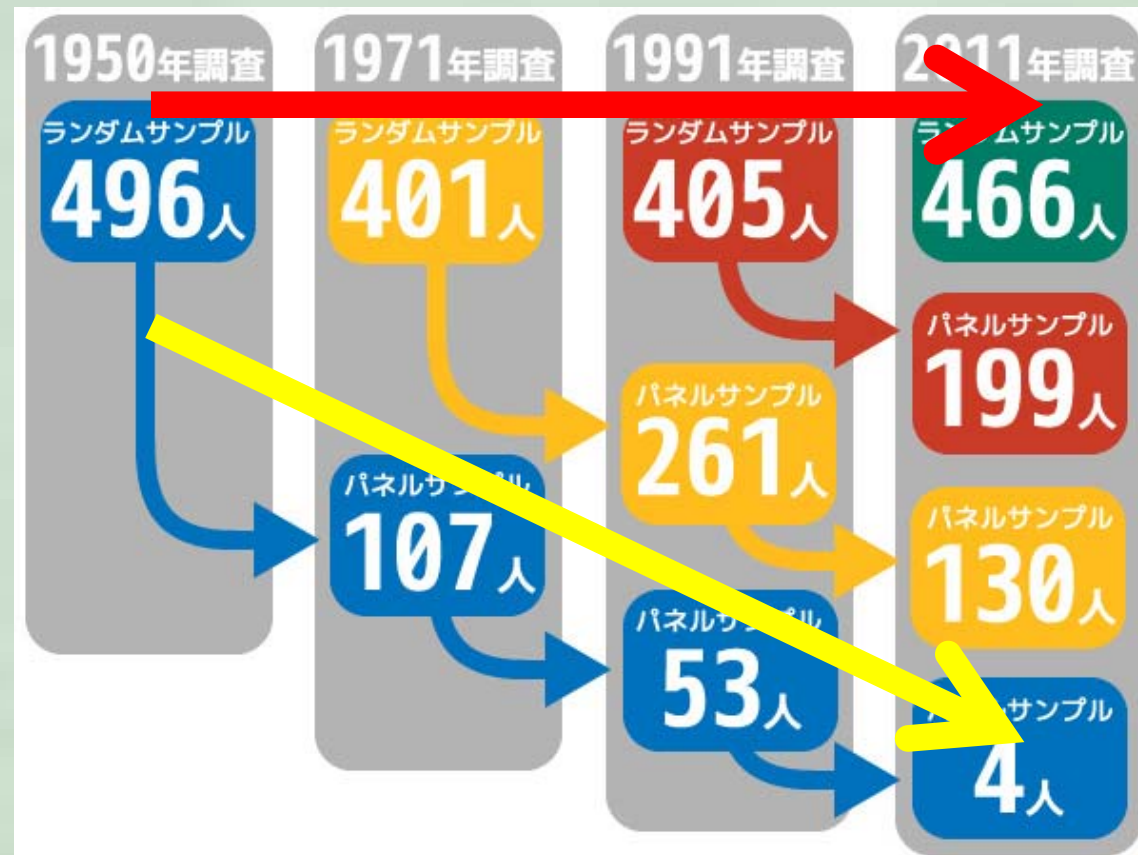
- 「鶴岡市における共通語化の調査」
 - <http://www2.ninjal.ac.jp/keinen/turuoka/>
- 国立国語研究所が実施
 - 社会調査型言語調査の定点経年調査の1つ
 - 他に, 岡崎調査, 北海道調査
 - 鶴岡調査・岡崎調査の第1回, 第2回調査では, 統計数理研究所のメンバーも参加
(林知己夫, 青山博次郎, 西平重喜, 鈴木達三, 林文 敬称略)
- 昭和25年からほぼ20年ごと
 - 第1回調査 昭和25年(1950年) 10月~11月
 - 第2回調査 昭和47年(1972年) 3月
 - 第3回調査 平成3年(1991年) 11月
 - 第4回調査 平成23年(2011年) 11月

鶴岡調査(つづき)

- ランダム・サンプリング調査(RS調査)と
パネル調査(P調査)

地域の
言語変化の
実態を解明

個人の
言語変化の
実態を解明





国語研・鶴岡調査のHPより

鶴岡調査(つづき)

- ランダム・サンプリング調査(RS調査)
 - 第4回調査(2011年11月)は
 - 統計数理研究所調査科学NOE形成事業の一環
 - 国立国語研究所と統計数理研究所調査科学研究センターの連携研修調査として実施
 - 母集団
 - 鶴岡市の旧市街地在住の15～79歳の男女
(第3回調査までは15～69歳の男女)
 - サンプルング法
 - 系統抽出法
 - 回収率 (第1回 99%, 第2回* 89%, 第3回 81%, 第4回 66%)

2. 調査項目

● 面接調査

－ 鶴岡方言の特徴である言語面に焦点をあてる項目

- 音声(単音とアクセント)
- 語彙・文法形態

- － 絵を見せたり, 口頭でなぞなぞ式の質問をして回答してもらう
- － 第4回はICレコーダで録音

－ 言語生活を焦点化した項目

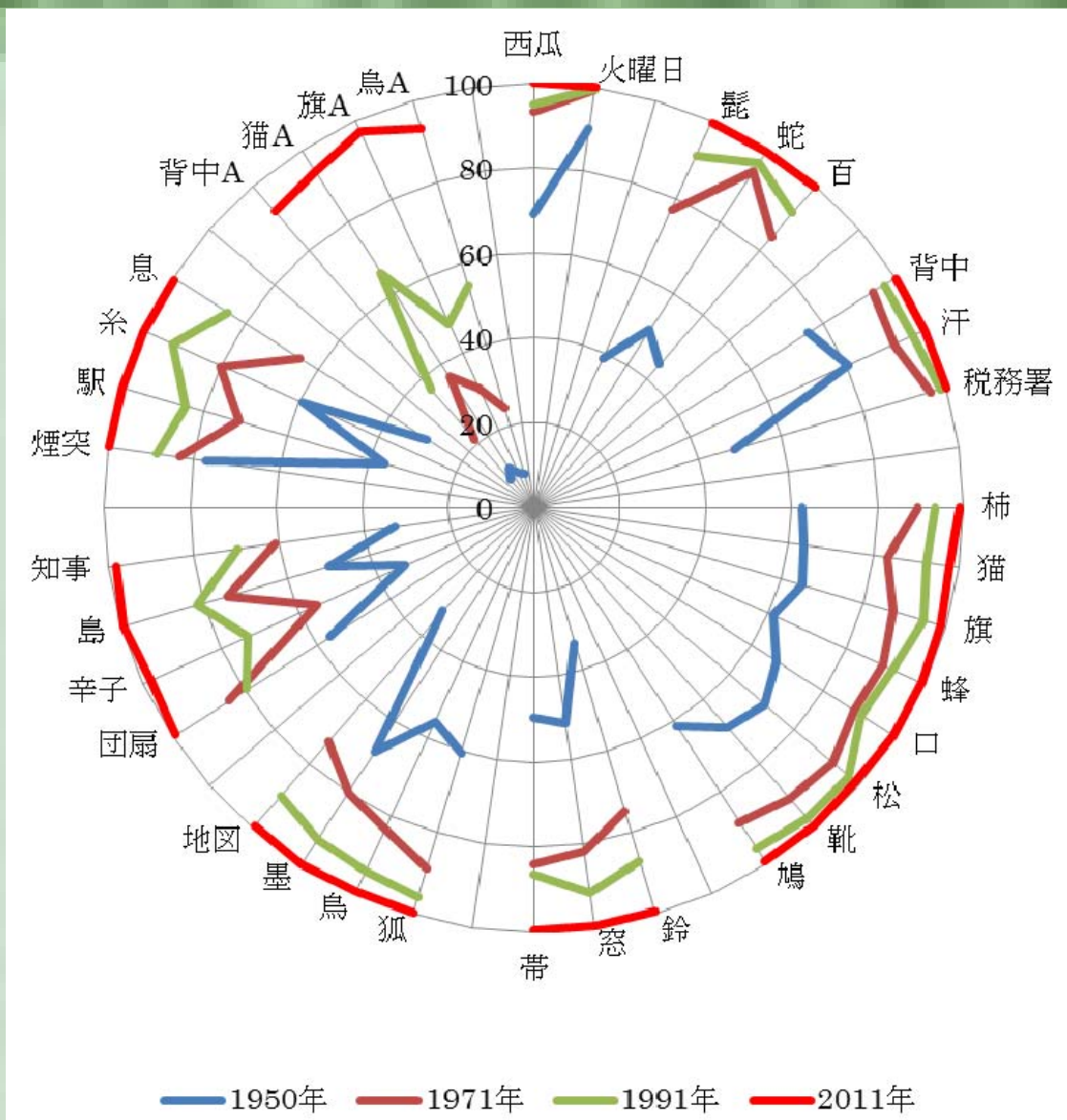
- 方言と共通語の使い分け意識
- マスメディアとの接触度
- 共通語話者との接触度

それでは, 今からことばのことについてお尋ねします。まず, 絵を見てお答えください。

211



- 音声31項目,
アクセント5項目,
計36項目
- 各項目の共通語
にあたる反応の
割合(共通語率)



3. コウホート分析

- データ

- 第1回から第4回までの鶴岡RS調査
- 分析対象サンプルサイズ (NRを除く／除かない)
 - 第1回：494/496, 第2回：400/401, 第3回：400/405, 第4回：464/466
- 各調査次の実施年を, (1950.10, 1972.03, 1991.11, 2011.11であるが)順に
1951年, 1971年, 1991年, 2011年
として扱った
- 年齢区分は, 15～69歳 (第4回は79歳まで) の5歳幅
- 男女別には分析していない
- 分析項目
 - 音声31項目, アクセント4項目 (除, 「団扇」), 計35項目
 - 各項目の共通語にあたる反応の割合 (共通語率)

コウホートモデル

- ロジット・コウホートモデル (割合のデータのための)

$$\log[\pi_{ij} / (1 - \pi_{ij})] = \beta^G + \beta_i^A + \beta_j^P + \sum_{k=1}^K w_{ij,k} \beta_k^C$$

$$\sum_{i=1}^I \beta_i^A = \sum_{j=1}^J \beta_j^P = \sum_{i=1}^I \sum_{j=1}^J w_{ij,k} \beta_k^C = 0$$

π_{ij} : 共通語率

β^G : 総平均効果

β_i^A : 年齢効果

β_j^P : 時代効果

β_k^C : コウホート効果

$w_{ij,k}$: セルのコウホート区分とパラメータのコウホート区分

の重なりの程度により決めるウェイト ($w_{ij,k} \geq 0, \sum_k w_{ij,k} = 1$)

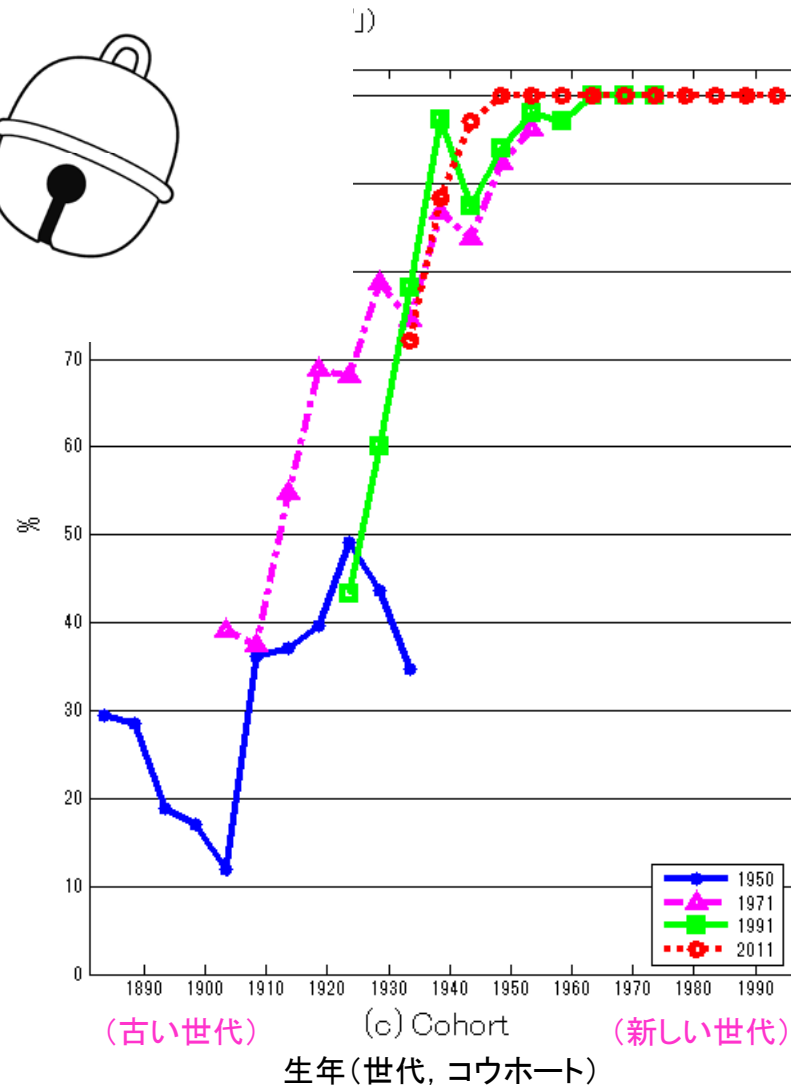
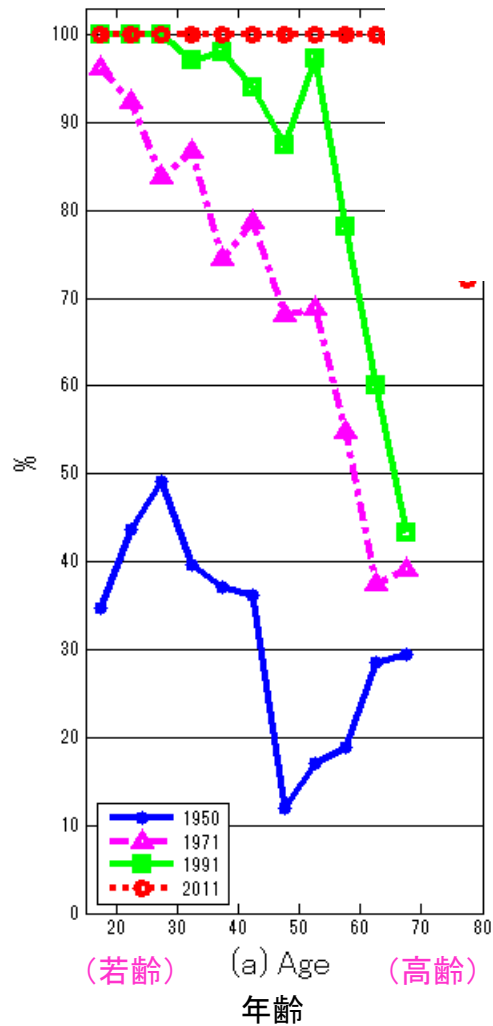
4. コウホート分析結果

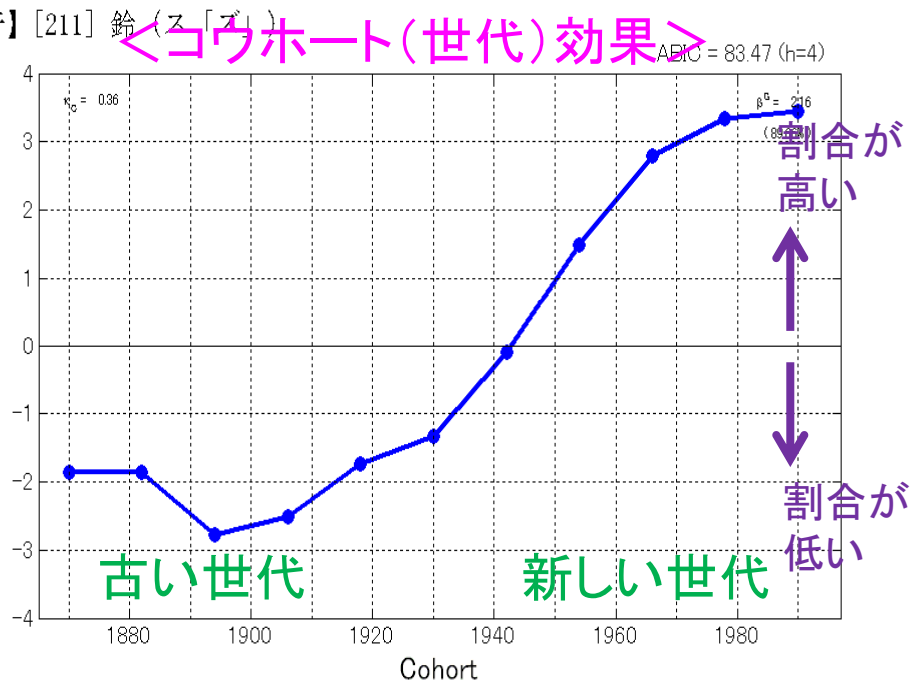
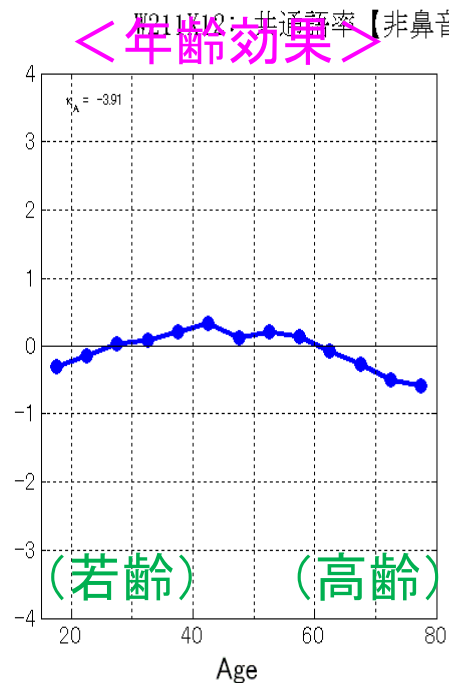
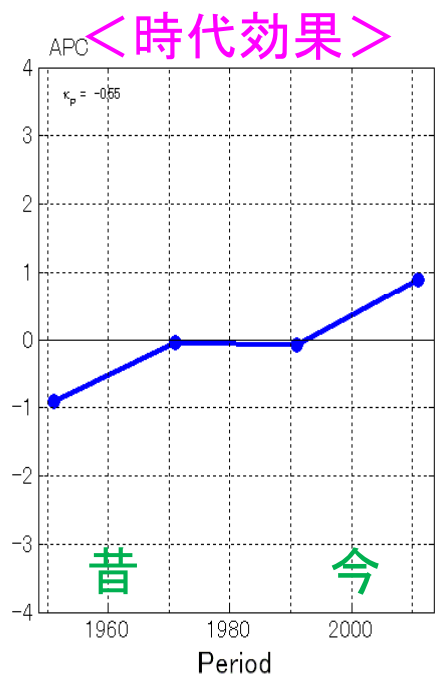
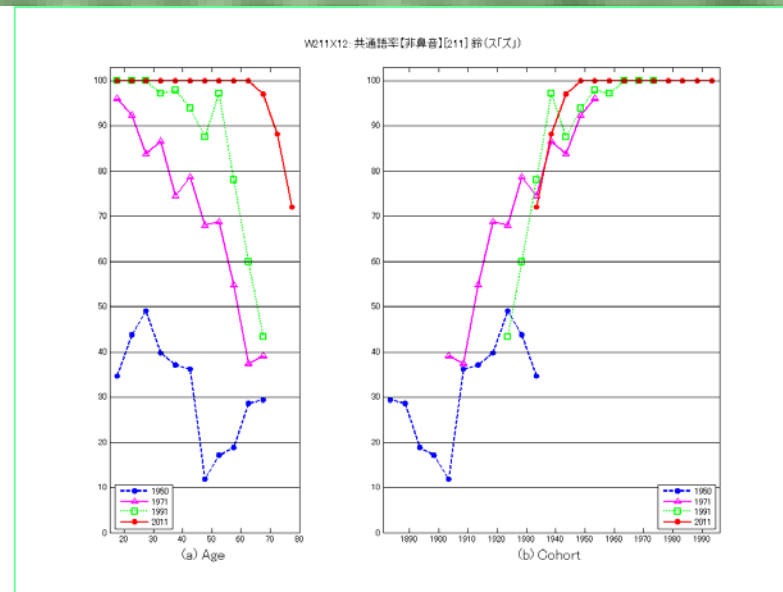
- 分析項目

- 音声31項目, アクセント4項目(除「団扇」), 計35項目
- 各項目の共通語にあたる反応の割合(共通語率)

「鈴(スズ)」の年齢・世代別の変化

211





分析結果の分類

● 最適モデルの分類

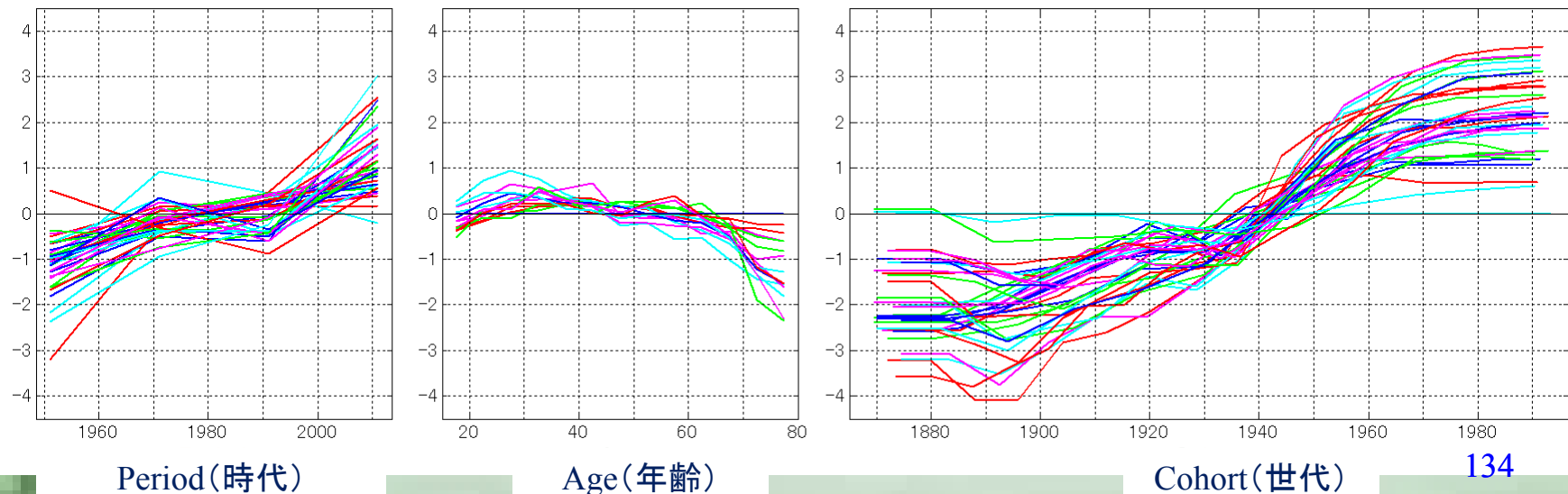
- 世代C効果あり 34/35
- 時代P効果あり 35/35
- 年齢A効果あり 14/35
- PとC効果 34/35

- ✓ A効果 ... 年齢(Age)効果
- ✓ P効果 ... 時代(Period)効果
- ✓ C効果 ... 世代(Cohort)効果

最適モデル	項目数
AP	1
PC	21
APC	13
	35

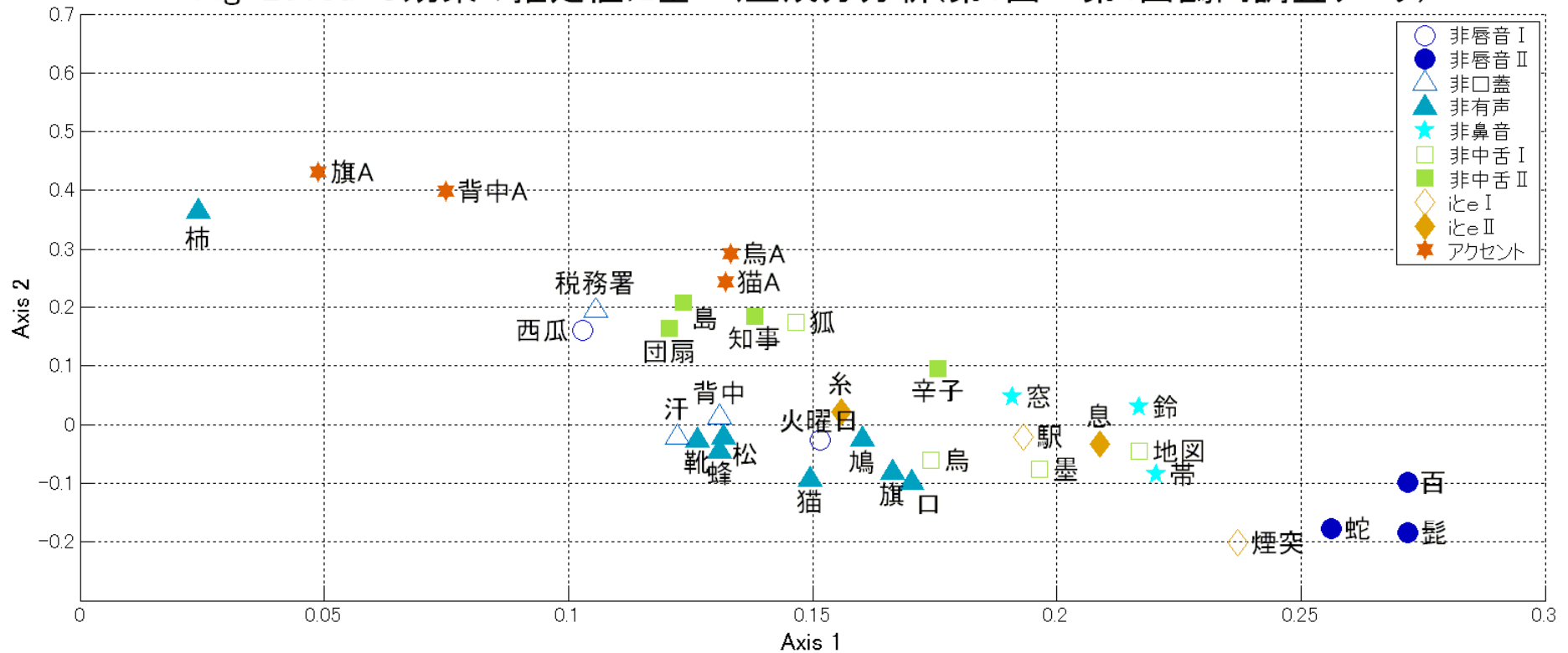
35項目分析結果の重ね描き

- コウホート効果
 - 変化幅が3効果の中で大きい傾向. 新しい世代ほど共通語率が高い
 - 1930年代生まれ以降で上昇が立ち上がる傾向
- 時代効果
 - 近年ほど共通語率が上昇傾向(70年代から90年代に下降するものもある)
 - 50年代から70年代, 90年代から今日の変化が大きい傾向
- 年齢効果
 - 30歳前後をピークに共通語率が下降する傾向



調査項目の分類(主成分分析)

Fig. 2013a: 3効果の推定値に基づく主成分分析(第1回～第4回鶴岡調査データ)



文 献

1. 「鶴岡市における言語調査」研究グループ(2015).
第4回鶴岡市における言語調査 ランダムサンプリング調査
の概要 資料編:第1分冊「音声・音韻」編. 統計数理研究
所・国立国語研究所.
2. 「鶴岡市における言語調査」研究グループ(2015).
第4回鶴岡市における言語調査 ランダムサンプリング調査
の概要 資料編:第2分冊「語彙・文法, 言語生活項目」編.
統計数理研究所・国立国語研究所.
3. 中村隆(2013). コウホート分析入門—鶴岡調査データを例
に一, 統計, 64, 50-54.
4. 横山詔一, 中村隆, 阿部貴人, 前田忠彦, 米田正人
(2015). 成人の同一話者を41年間追跡した共通語化研究,
29(7), 241-250.

IV.

日本人の齲蝕

— 歯科疾患実態調査 —

歯科疾患実態調査（厚生労働省）

- 厚生労働省が行う歯科疾患有病状況調査
- 昭和32年（1957）から6年ごとに、国民栄養調査と共に行われる国家承認統計調査
 - － 最新第10回調査は平成23年（2011）
- 調査対象
 - － 全国を対象として、国民生活基礎調査により設定された単位区から無作為に抽出した300単位区内の満1歳以上の世帯員
- 調査項目
 - － う蝕とその処置状況，歯肉の状況，歯列・咬合の状況，フッ化物の塗布状況，歯ブラシの使用状況，顎関節の状況，インプラントの状況，かみあわせの状況

歯種別DMFT

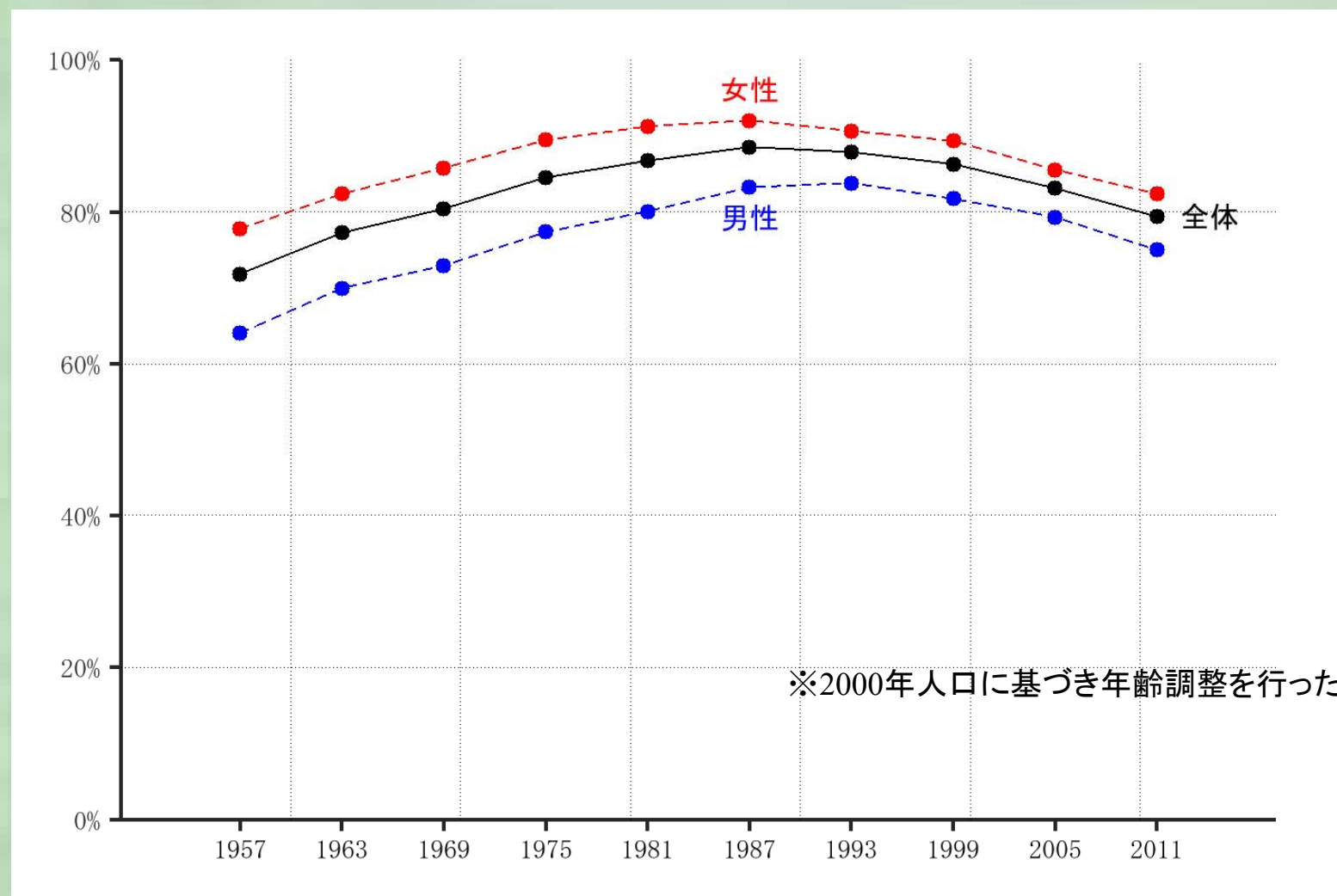
- DMF

- D: 未処置歯 (decayed teeth)
- M: 齲蝕による喪失歯 (missing teeth because of caries)
- F: 処置歯 (filled teeth)
- 齲蝕経験歯数: 一人当たりの未処置歯, 喪失歯, 処置歯の合計

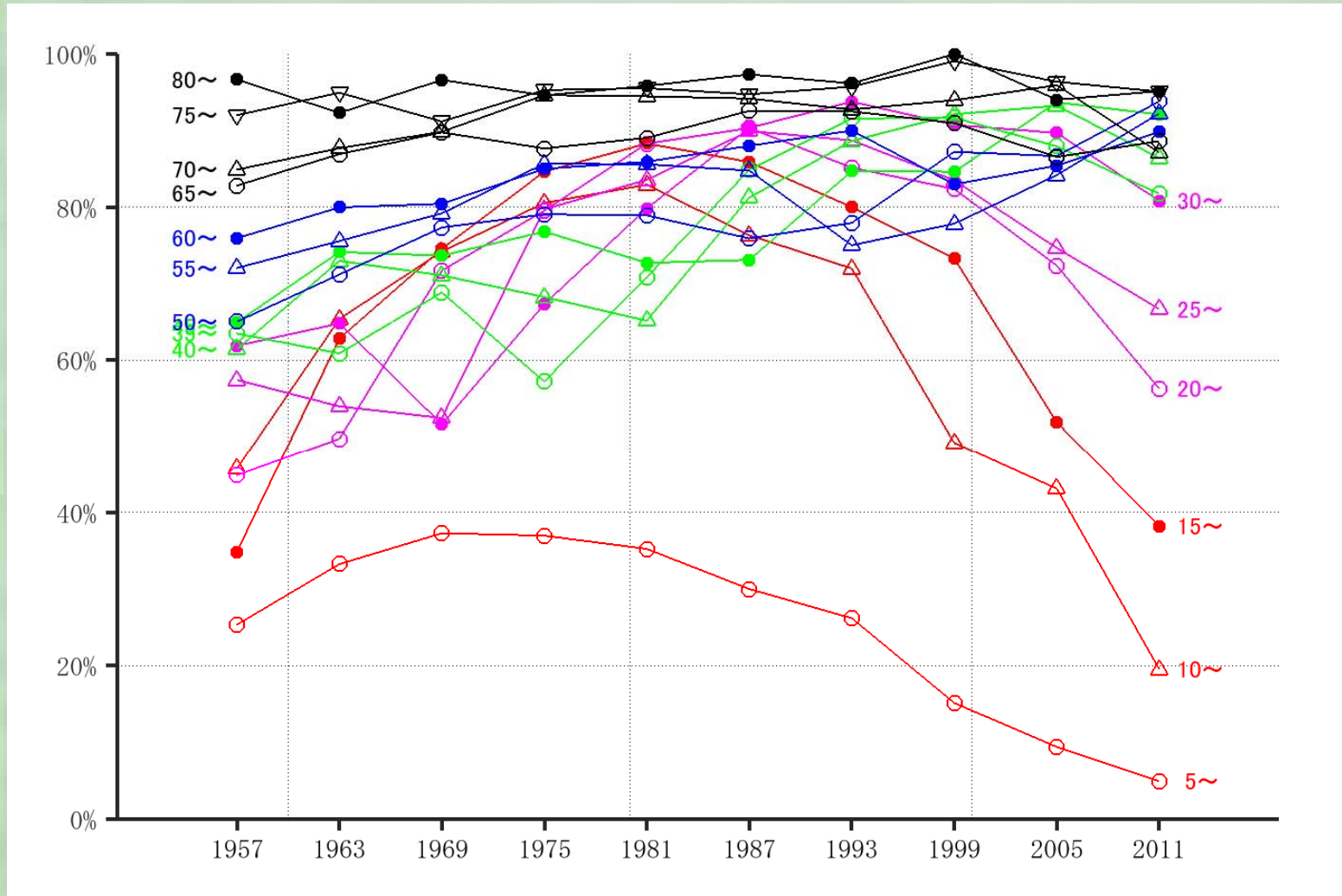
- 分析対象: 歯種別DMFT (齲蝕割合)

- 歯種別一人平均齲蝕経験歯数
 - 左右平均で0~1本の範囲 (≒割合)
 - 左右の同名歯においては齲蝕経験に差がないとして

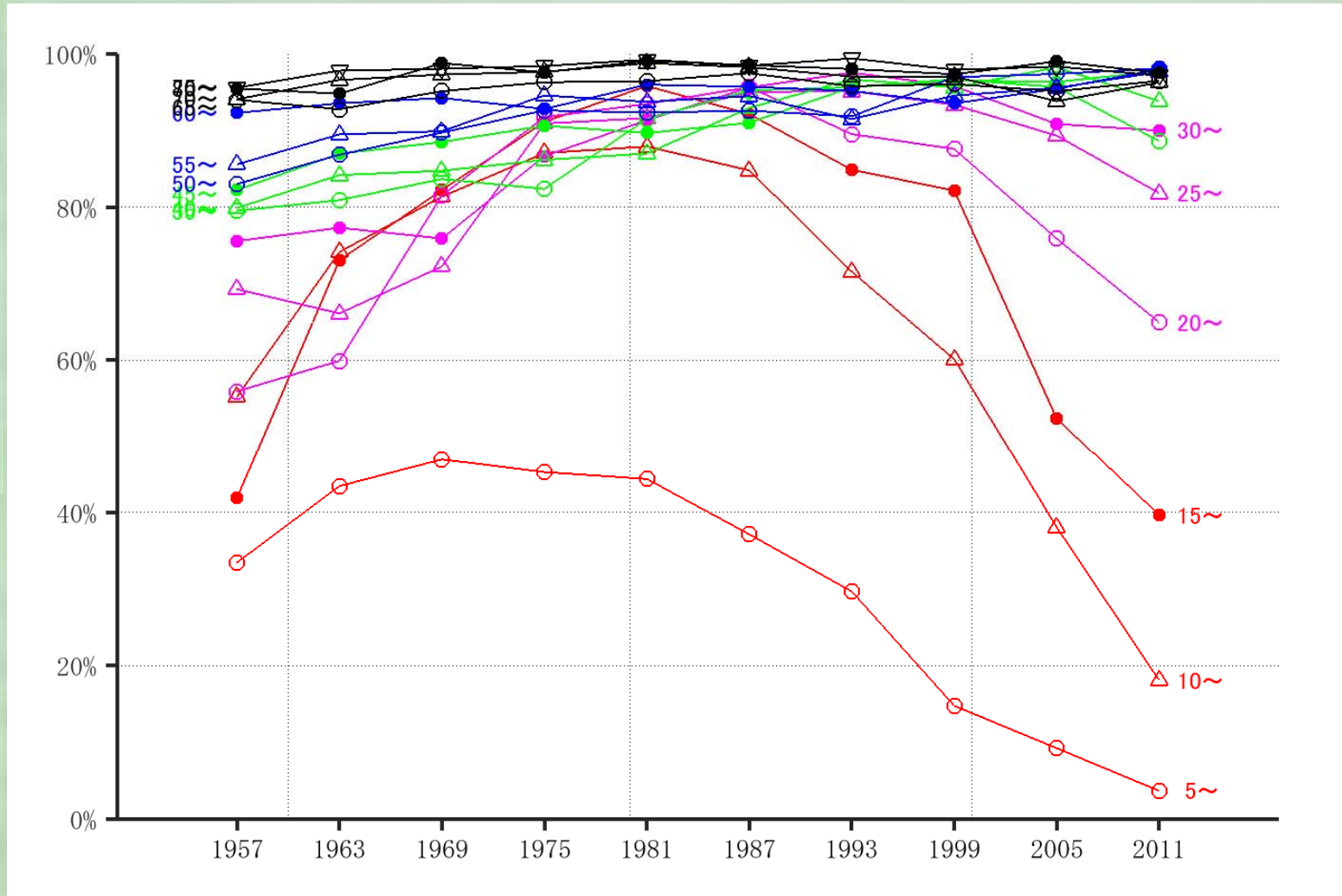
齲蝕割合（下顎第一大臼歯DMFT14）



齲蝕割合(下顎第一大臼齒) **男性**

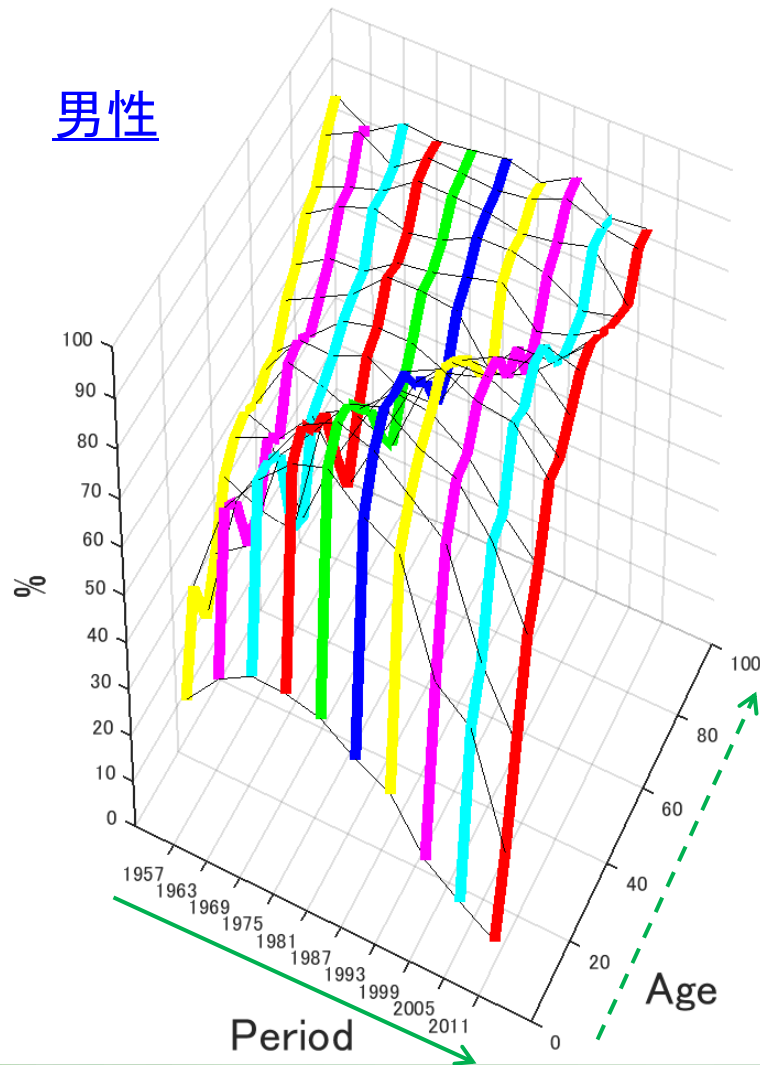


齲蝕割合(下顎第一大臼齒) **女性**

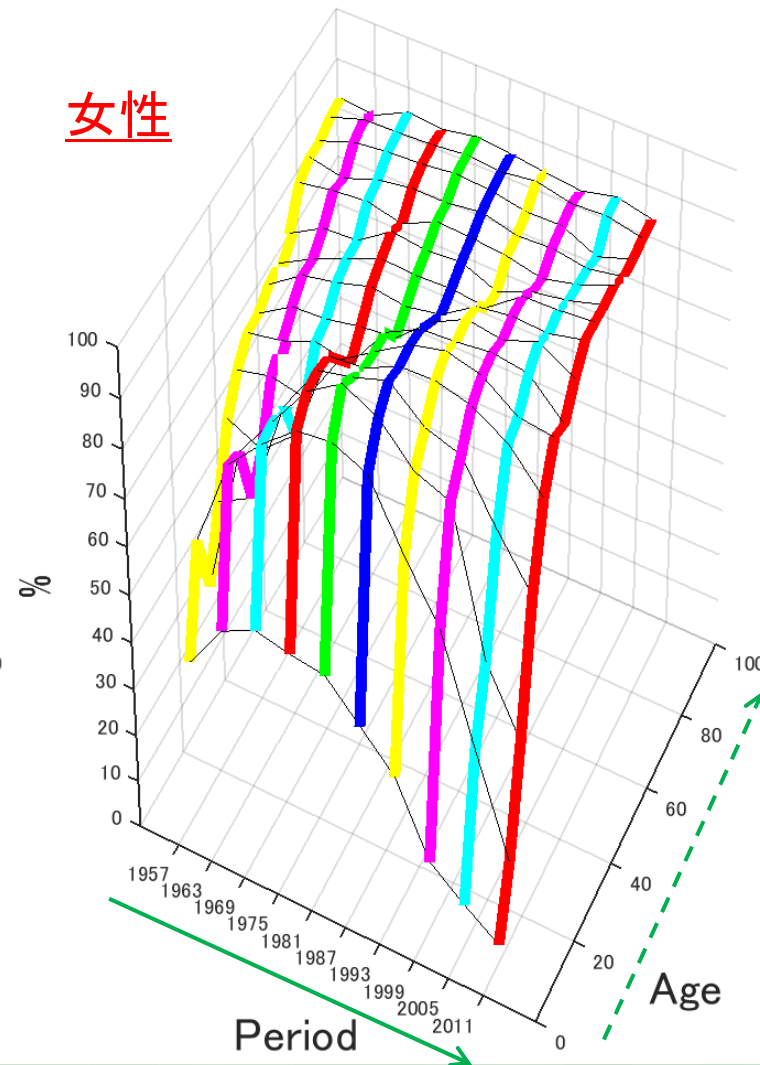


齲蝕割合(下顎第一大臼齒)

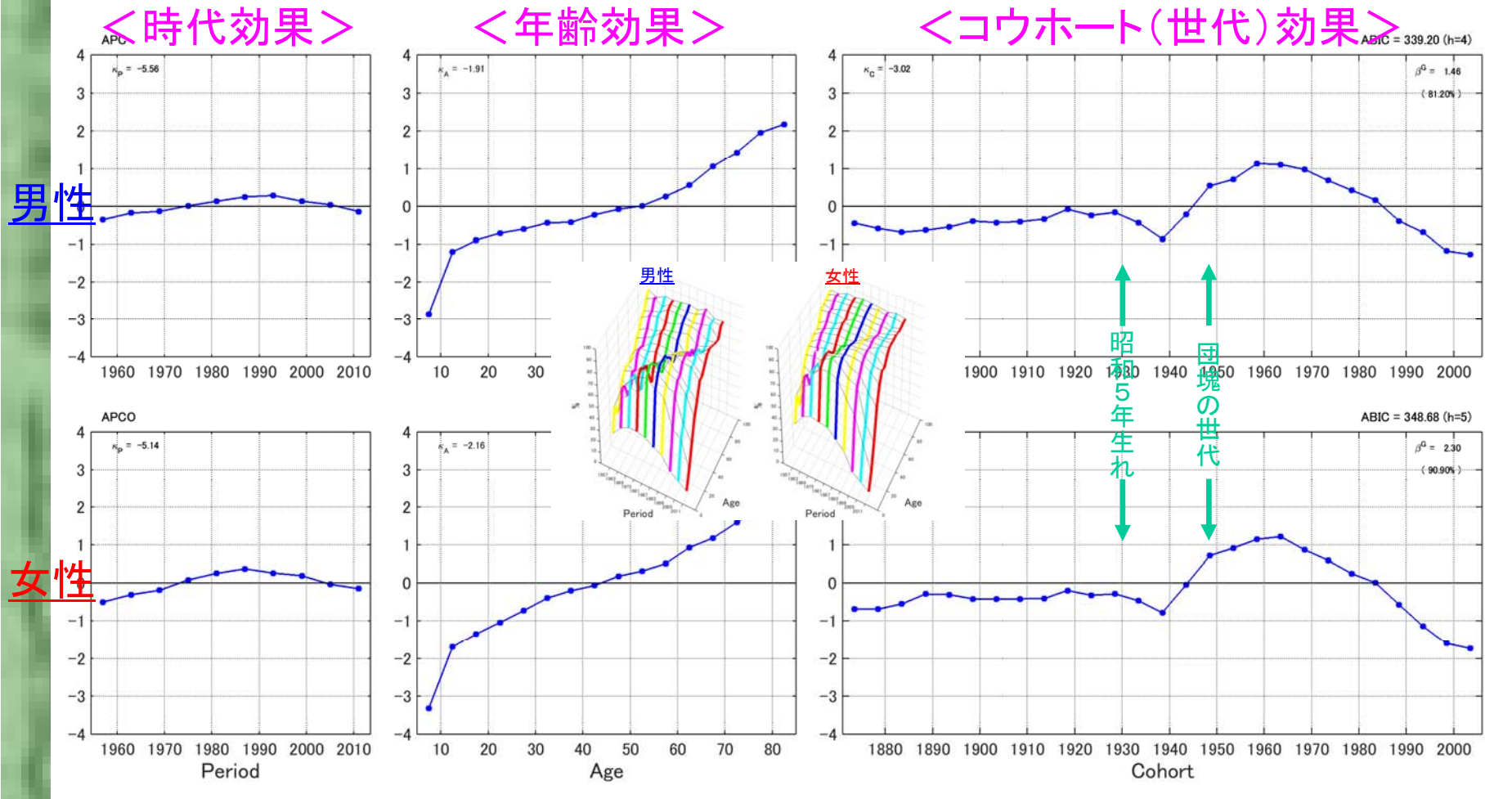
男性



女性



齲蝕割合（下顎第一大臼歯）

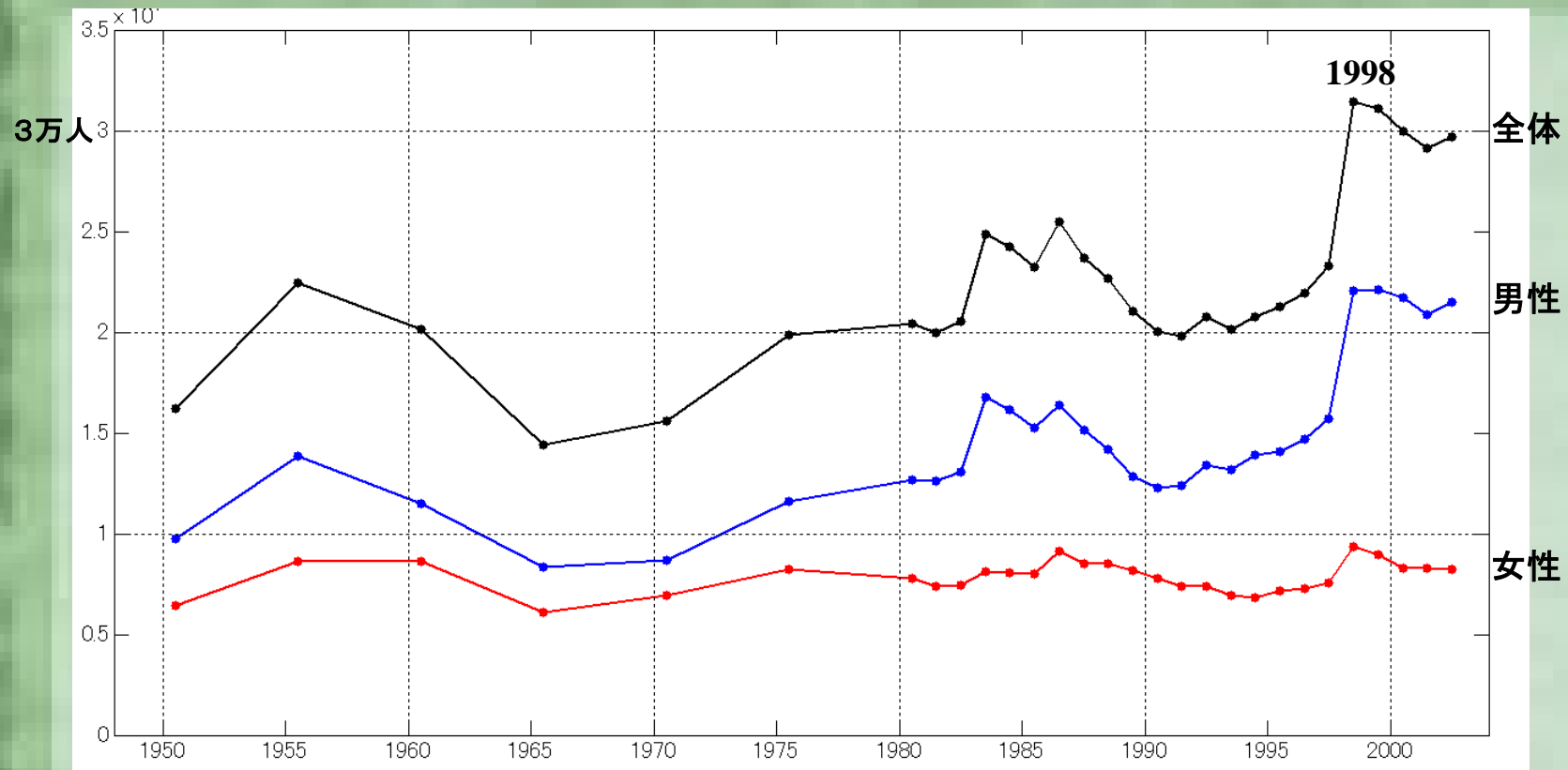


文 献

1. 那須郁夫, 森本基, 中村隆 (1984). 下顎第1大臼歯齲蝕経験のコウホート分析—歯科疾患実態調査報告資料による—. 口腔衛生学会雑誌, 34(3), 240-247.
2. 中村隆, 那須郁夫, 鎌倉稔成 (1989). 歯科疾患実態調査データのコウホート分析, 統計数理研究所共同研究レポート, 17.
3. 那須郁夫, 中村隆, 森本基 (1996). 永久歯現在歯のコウホート分析, 歯科疾患実態調査資料を用いて. 老年歯科医学, 11(2), 88-99.
4. 那須郁夫, 中村隆, 森本基 (1996). 歯科疾患実態調査資料による歯磨き回数のコウホート分析. 口腔衛生学会雑誌, 46(3), 306-317.

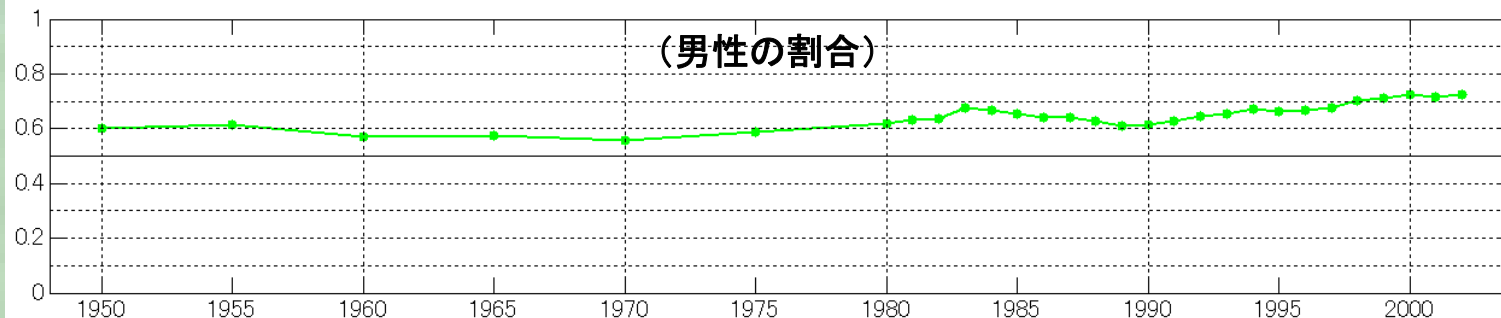
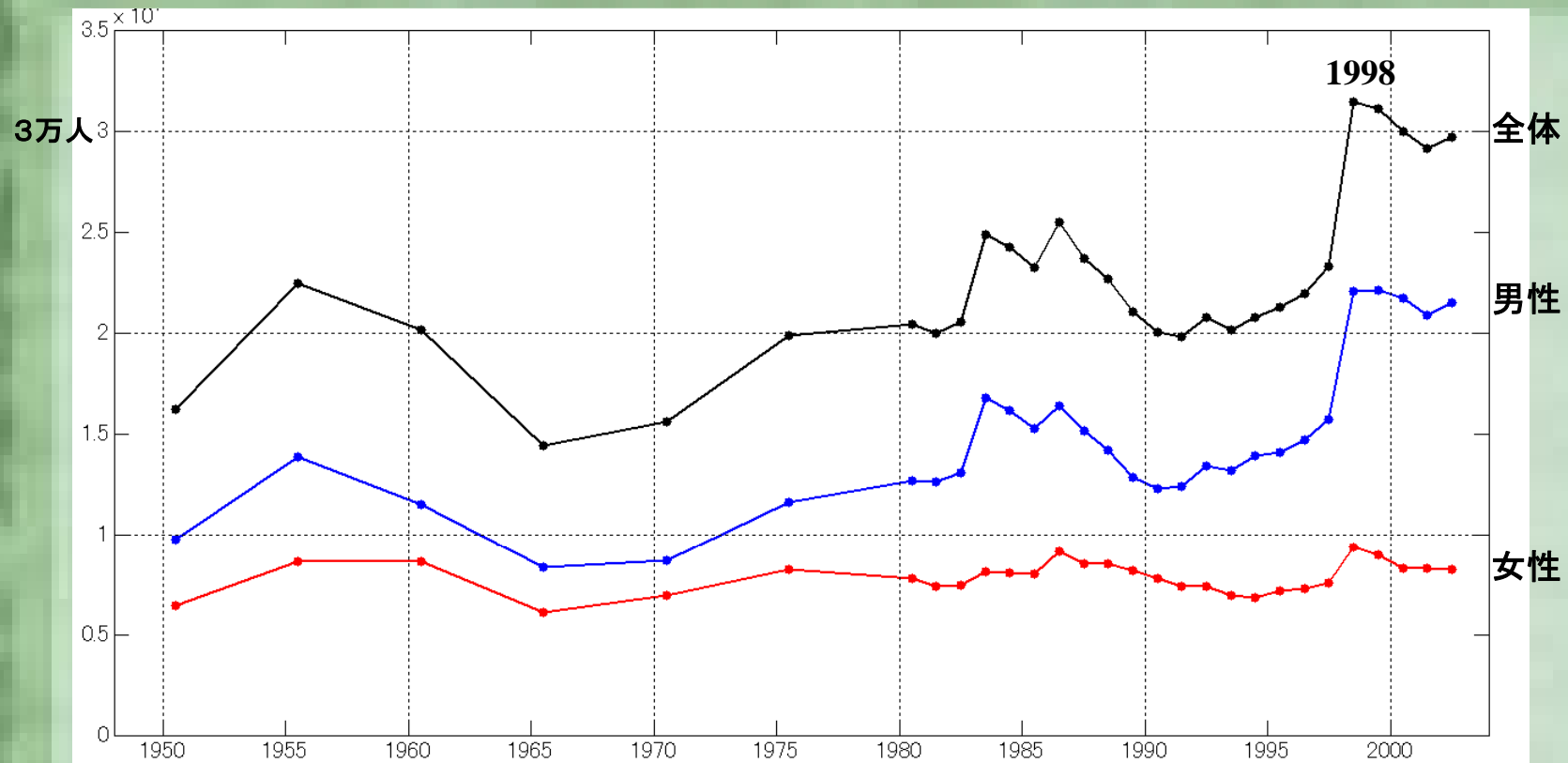
V.
日本人の自殺
—人口動態統計—

自殺者数の推移



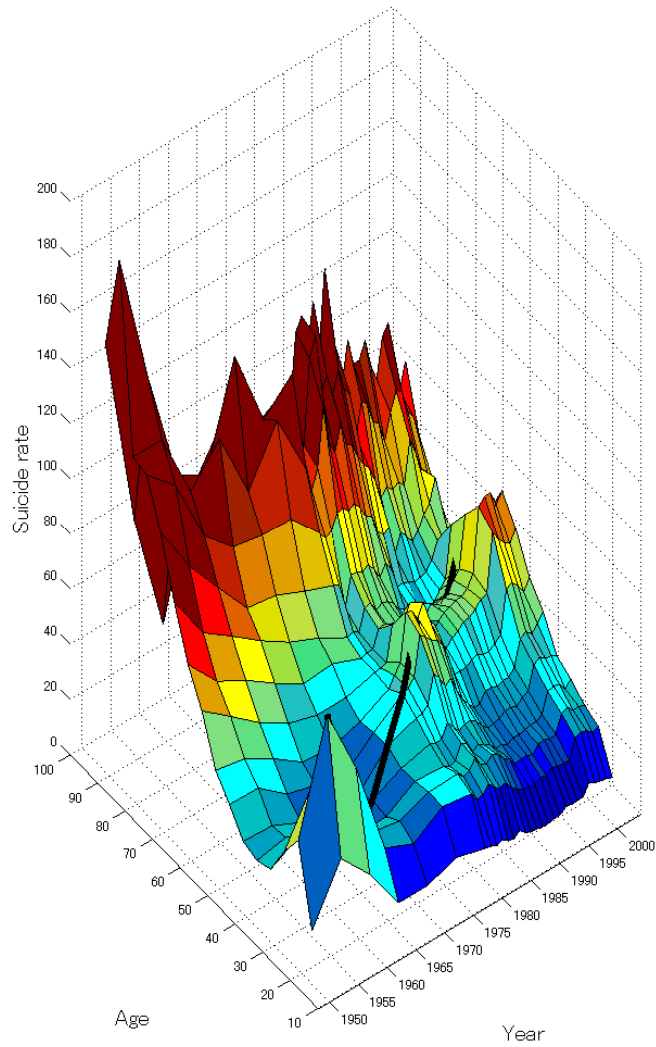
- 1998年に急増して、3万人超。(脳血管疾患死亡は6万弱)
 - 約7割が男性
- 1950年代, 1980年代半ばも自殺者数多。
 - 1980年代半ば, および, 1998年以降の増加は, 男性に一層顕著

自殺者数の推移

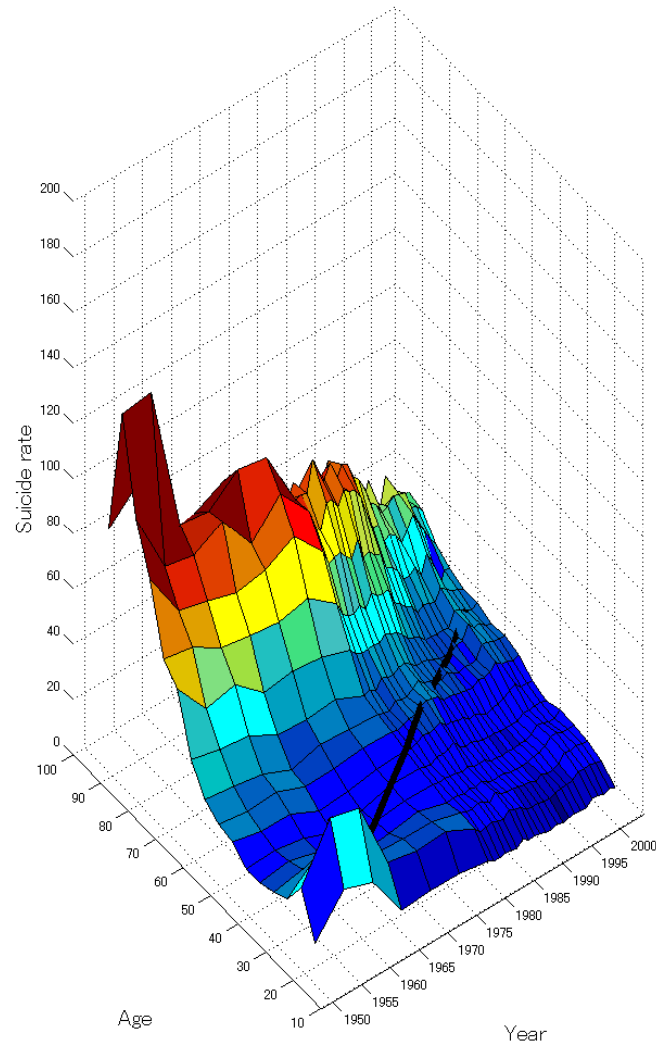


年齢別自殺率の推移

男性 Males



女性 Females



ポワソン・コウホートモデル

- 年齢 × 時代の交互作用効果をもつモデル

$$\eta_{ij} \equiv \log \lambda_{ij}$$
$$= \log n_{ij} + \beta^G + \beta_i^A + \beta_j^P + \sum_k w_{k,ij}^C \beta_k^C + \sum_{j^*} w_{j^*,ij}^{AP} \beta_{ij^*}^{AP}$$

λ_{ij} : 第*i*年齢区分, 第*j*調査年の期待死亡数

n_{ij} : 第*i*年齢区分, 第*j*調査年の人口 (オフセット)

β^G : 総平均効果 (grand mean)

β_i^A : 年齢効果 ($i = 1, \dots, I$)

β_j^P : 時代効果 ($j = 1, \dots, J$)

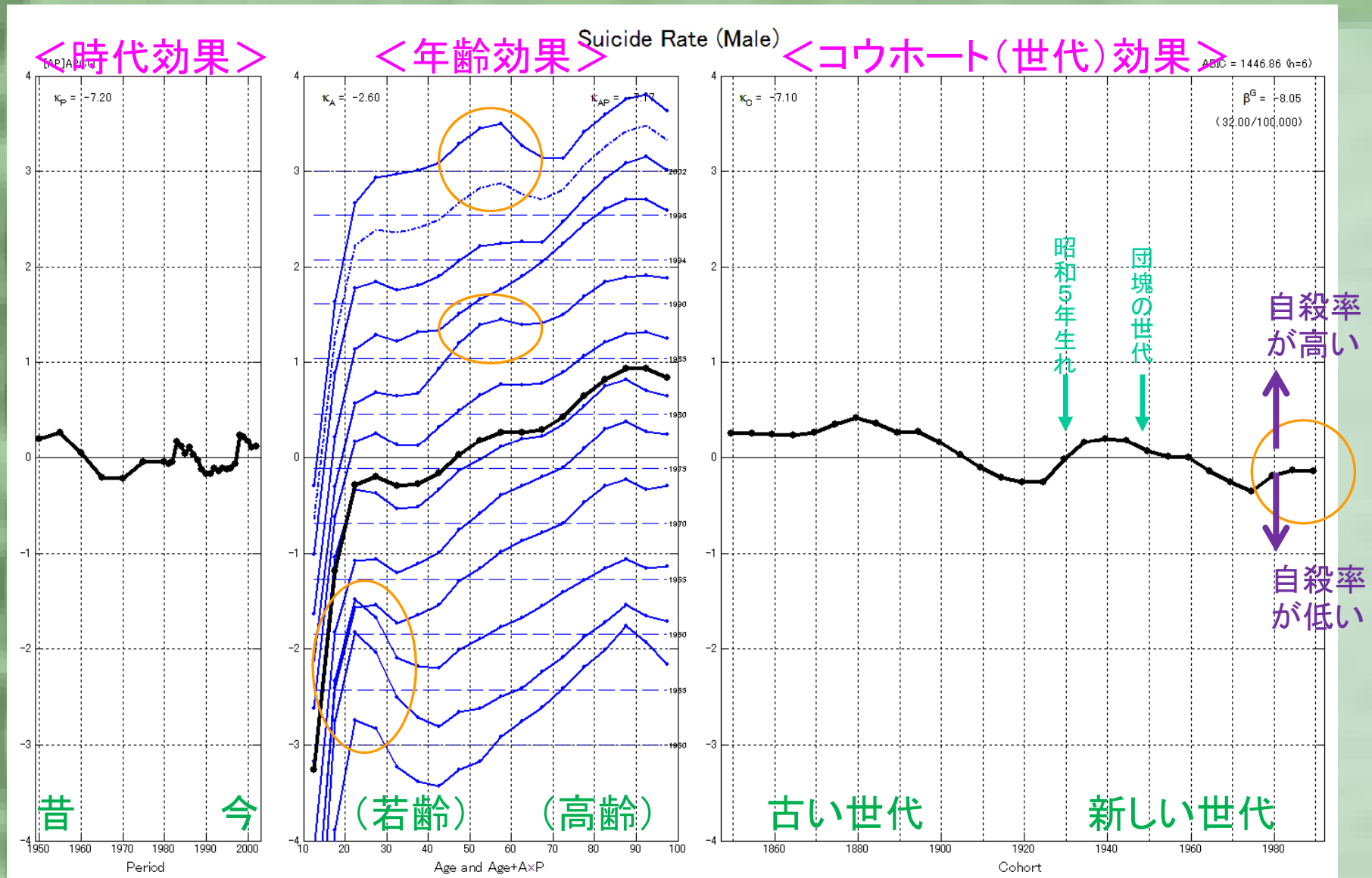
β_k^C : コウホート効果 ($k = 1, \dots, K$)

$\beta_{ij^*}^{AP}$: 年齢×時代の交互作用効果 ($i = 1, \dots, I; j^* = 1, \dots, J^*$)

$$\left(w_{k,ij} \geq 0, \quad \sum_k w_{k,ij} = 1 \right)$$

$$\left(w_{j^*,ij} \geq 0, \quad \sum_{j^*} w_{j^*,ij} = 1 \right)$$

コウホート分析結果（自殺率, 男性）

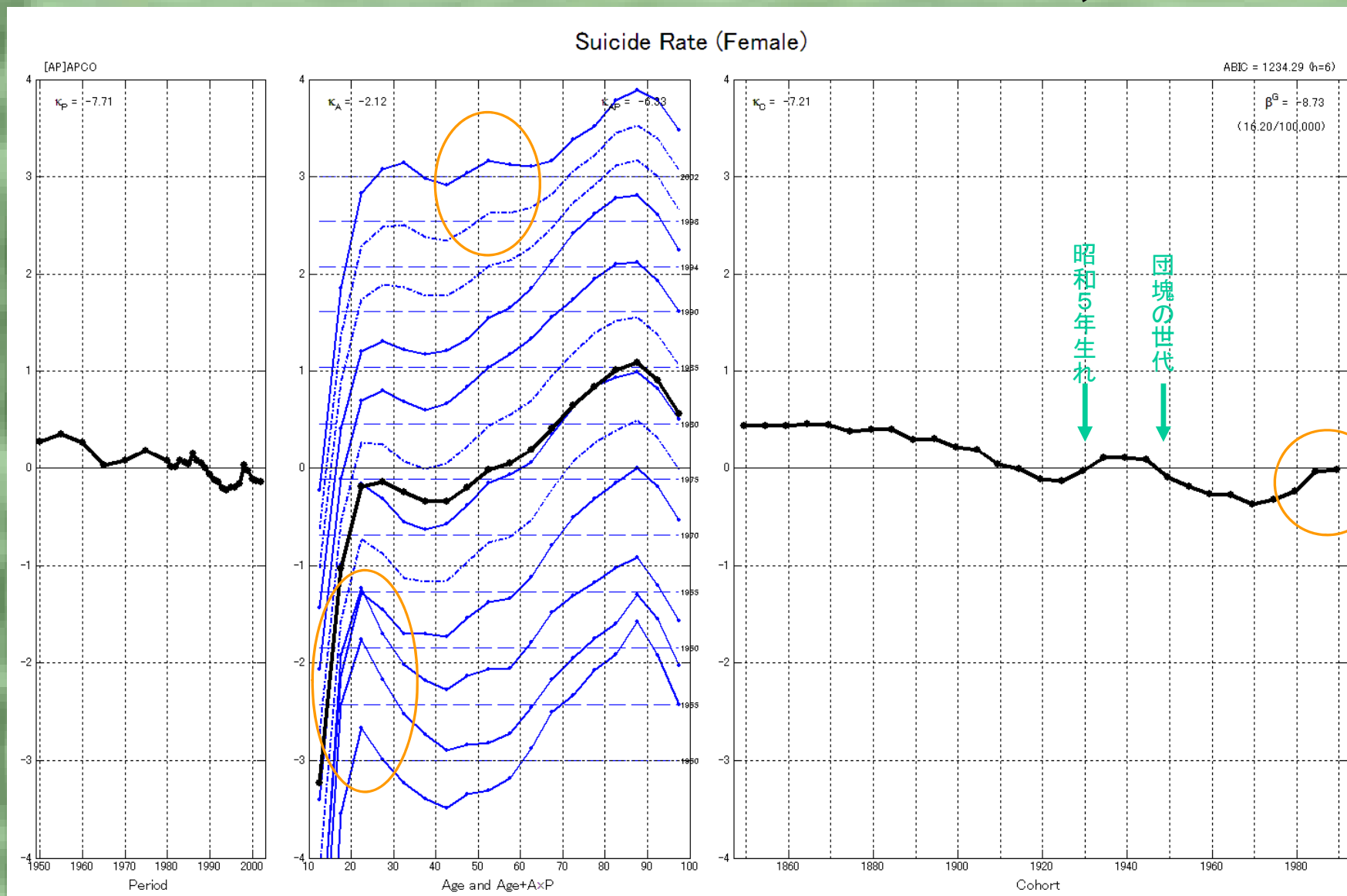


Period(時代)

Age(年齢)+A × P

Cohort(世代)

コウホート分析結果（自殺率, **女性**）



Period(時代)

Age(年齢)+A×P

Cohort(世代)

自殺のまとめ

- 自殺は、時代の影響を受けている
 - 自殺者数の約1/3(1万人程度)
- 時代の影響 → 時代効果
 - 社会の全成員が受けた影響
 - 1950年代, 1980年代半ば, 1998年以降
- 時代の影響 → 年齢 × 時代の交互作用効果
 - ある年齢層が敏感に反応
 - 1950年代の20歳台, 1980年代半ばの50歳台, 1998年以降の50歳台
- 時代の影響 → コウホート効果
 - 特定の世代に影響が固定
 - 昭和10年前後生まれ(1950年代に20歳台, 1980年代半ばに50歳台)
 - 1980年代以降生まれ(1998年以降に若齢)

文 献

1. Ooe, Y., Nakamura, T. and Ohno, Y. (2009). Age-period-cohort analysis of suicides among Japanese 1950-2003: A Bayesian cohort model analysis, *Japan Hospitals*, 28, 71-78.
2. 大江洋介, 大野ゆう子, 中村 隆 (2012). 日本人自殺率の年齢・時代・世代効果と交互作用効果, 第2回自殺リスクに関する研究会予稿集, 41-50.
3. 三輪 のり子, 中村 隆, 田中 貴子, 大江 洋介, 大野 ゆう子 (2013). 都道府県別にみた自殺率に対する年齢・時代・世代要因の影響ー6県における試みー, 日本公衆衛生雑誌, 60-10, 569.

VI. 日本人の国民性調査

日本人の国民性調査

- 統計数理研究所が実施
- 昭和28年(1953年)から5年ごと
 - 継続調査(反復横断調査)
- 平成25年(2013年)秋に, 第13次全国調査
 - 母集団: 全国の成人男女(住民基本台帳)
 - サンプルング法: 層別多段抽出法
 - 計画標本サイズ: 6,400
 - 400地点(市区町村), 1地点平均16人
 - K型, M型調査票を地点ごとに折半で割り当て
 - 回収率: 50%(49.5%)
 - K型: 1,591/3,216; M型: 1,579/3,184

<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/>

日本人の国民性調査



日本人の国民性調査とは

統計数理研究所では、1953年以来5年ごとに「日本人の国民性調査」という社会調査を継続実施しています。このサイトは「日本人の国民性調査」と、関連したその他の調査研究を紹介するものです。

調査の結果、分かったことは？

日本人の国民性 第13次調査の結果をご紹介します。



結果のポイント

詳細な調査結果を見たい

単純集計やクロス集計の結果を表とグラフにまとめてあります。



集計結果

調査について問い合わせたい

よくあるご質問とそれに対するお答えをまとめてあります。

関連した調査研究を知りたい

関連した調査研究へのリンクをまとめてあります。

日本人の国民性調査とは

歴史・経緯

三つの目的

調査実施の概要

第13次調査の結果のポイント

資料と関連リンク

集計結果

関連した調査研究

Q&A

お問合せ先・利用条件・更新履歴

国民性の研究

- #9.1 日本人の性格(長所)
- #9.6 日本人・西洋人の優劣
- #9.12 日本の「科学技術の水準」
- #9.12a 日本の「芸術」
- #9.12b 日本の「経済力」
- #9.12c 日本の「生活水準」
- #9.12d 日本の「心の豊かさ」
- #9.14 外国人との結婚
- #9.15 外国旅行の経験
- #9.16 国際貢献
- #9.17 地球環境
- #9.22c 生まれかわりたい国

このページは、第9次～第13次全国調査で使われた調査項目の結果をまとめたものです。

日本人の国民性調査

- 統計数理研究所が実施
- 昭和28年(1953年)から5年ごと
 - 継続調査(反復横断調査)
- 平成25年(2013年)秋に, 第13次全国調査
 - 母集団: 全国の成人男女(住民基本台帳)
 - サンプルング法: 層別多段抽出法
 - 計画標本サイズ: 6,400
 - 400地点(市区町村), 1地点平均16人
 - K型, M型調査票を地点ごとに折半で割り当て
 - 回収率: 50%(49.5%)
 - K型: 1,591/3,216; M型: 1,579/3,184

3つの目的

1. 国民性の解明

調査結果をとおして、日本人のものの見方や考え方とその変化を明らかにしていくこと

2. 調査手法の研究開発

実際の調査を行いながら、これからの社会変化にも対応できる新たな統計調査手法を研究していくこと

3. 統計手法の研究開発

調査データを分析するためのよりすぐれた統計的方法を研究していくこと

国民性調査等の実施年

- 昭和28年(1953年) 第1次
- 昭和33年(1958年) 第2次
- 昭和38年(1963年) 第3次
- 昭和43年(1968年) 第4次
- 昭和48年(1973年)*第5次
- 昭和53年(1978年)*第6次
- 昭和58年(1983年)*第7次
- 昭和63年(1988年)*第8次
- 平成 5年(1993年)*第9次
- 平成10年(1998年)*第10次
- 平成15年(2003年)*第11次
- 平成20年(2008年)*第12次
- 平成25年(2013年)*第13次(最新)

昭和25年(1950年)第1回鶴岡調査

NHK日本人の意識調査

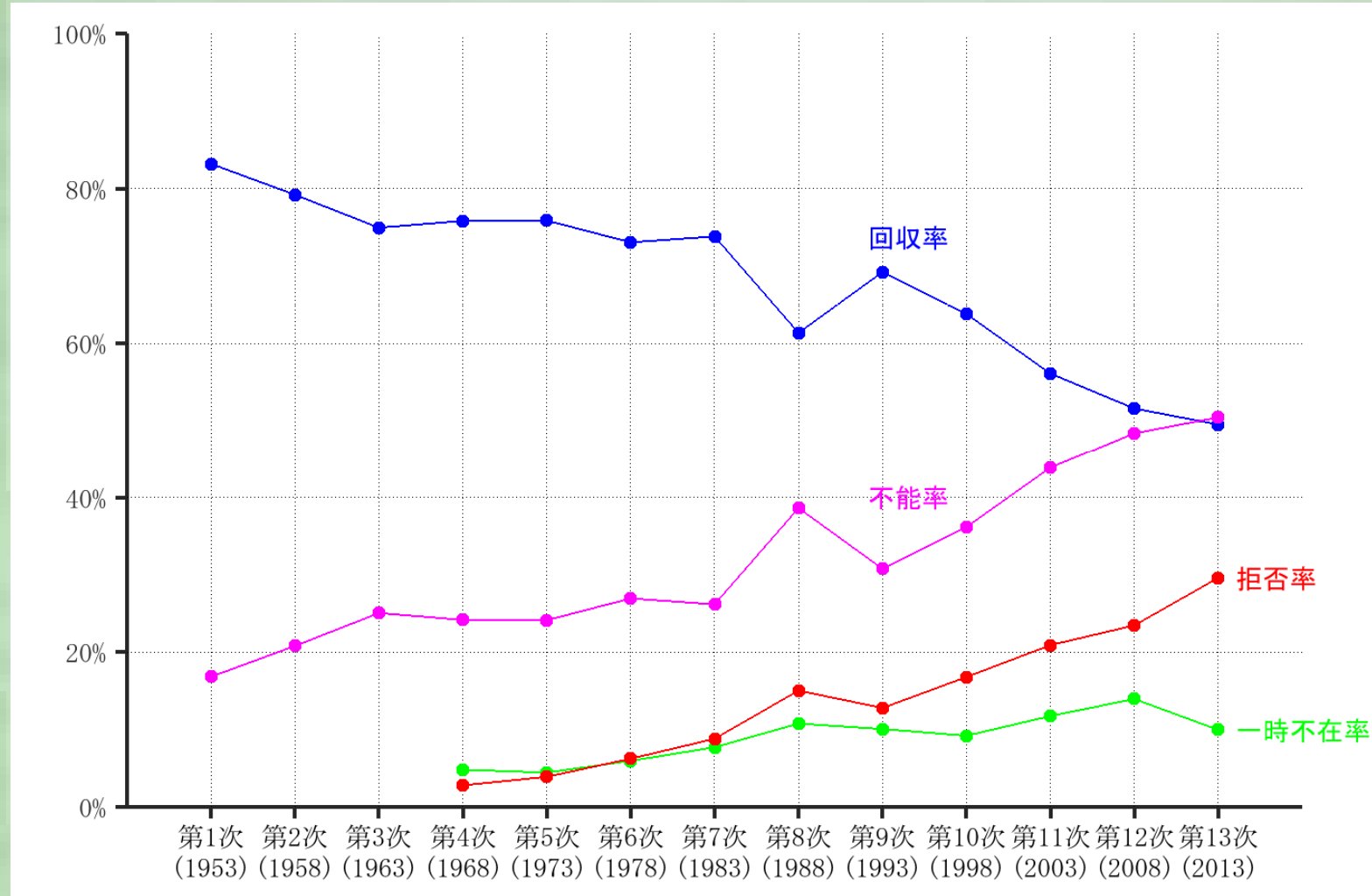
昭和47年(1972年)第2回鶴岡調査

昭和54年(1979年)統計数理研究所入所

平成3年(1991年)第3回鶴岡調査

平成23年(2011年)第4回鶴岡調査

回収率・不能率の推移



これからしばらくは

1. 長期継続項目の変化と安定

- i. 第2次(1958年)調査から第13次(2013年)調査へ
- ii. 第5次(1973年)調査から第13次(2013年)調査へ

2. 近年の変化

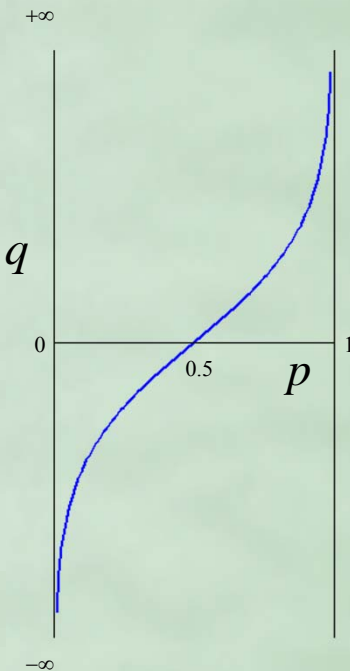
- i. 第11次(2003年)調査から第13次(2013年)調査へ
- ii. 第12次(2008年)調査から第13次(2013年)調査へ

◆ 東日本大震災を挟む意識変化

変化の大きさについて

- 割合の変化で見ることが多いが
 - 40%が50%に変化と, 5%が15%に変化は同じか？
- 割合のロジットで見えてみることに
 - 割合: p ($0 < p < 1$)
 - ロジット: $q = \log \frac{p}{1-p}$ ($-\infty < q < +\infty$)
- ロジット・コウホートモデル

$$\eta_{ij} = \log \frac{\pi_{ij}}{1 - \pi_{ij}} = \beta^G + \beta_i^A + \beta_j^P + \beta_k^C$$



ロジットモデル

- ロジットモデル

$$\eta = \log \frac{\pi}{1-\pi} = \alpha + \beta x.$$

– x の単位当たりの変化に対するロジット η の変化

$$\frac{d\eta}{dx} = \beta. \quad \left[\frac{d\eta}{d\pi} = \frac{1}{\pi} - \frac{1}{1-\pi} = \frac{1}{\pi(1-\pi)} \right]$$

– x の単位当たりの変化に対する割合 π の変化

$$\frac{d\pi}{dx} = \frac{d\pi}{d\eta} \frac{d\eta}{dx} = \beta\pi(1-\pi).$$

1-i.

第2次 (1958年)

から

第13次 (2013年)

へ

第2次(1958年)から第13次(2013年)へ

- 第13次(2013年)調査で質問した継続調査項目
 - K票, M票あわせて83項目(255選択肢)
- 内, 第2次(1958年)以降も質問している項目
 - ただし, 第1次(1953年)では質問したが, 第2次(1958年)では質問しなかった項目については, 第1次の結果を流用
 - 結局, 20項目, その他・DKを除く63回答選択肢
- 全体, 男性, 女性についての時系列推移について
 - 割合のロジットの“レンジ”で変化の幅を把握

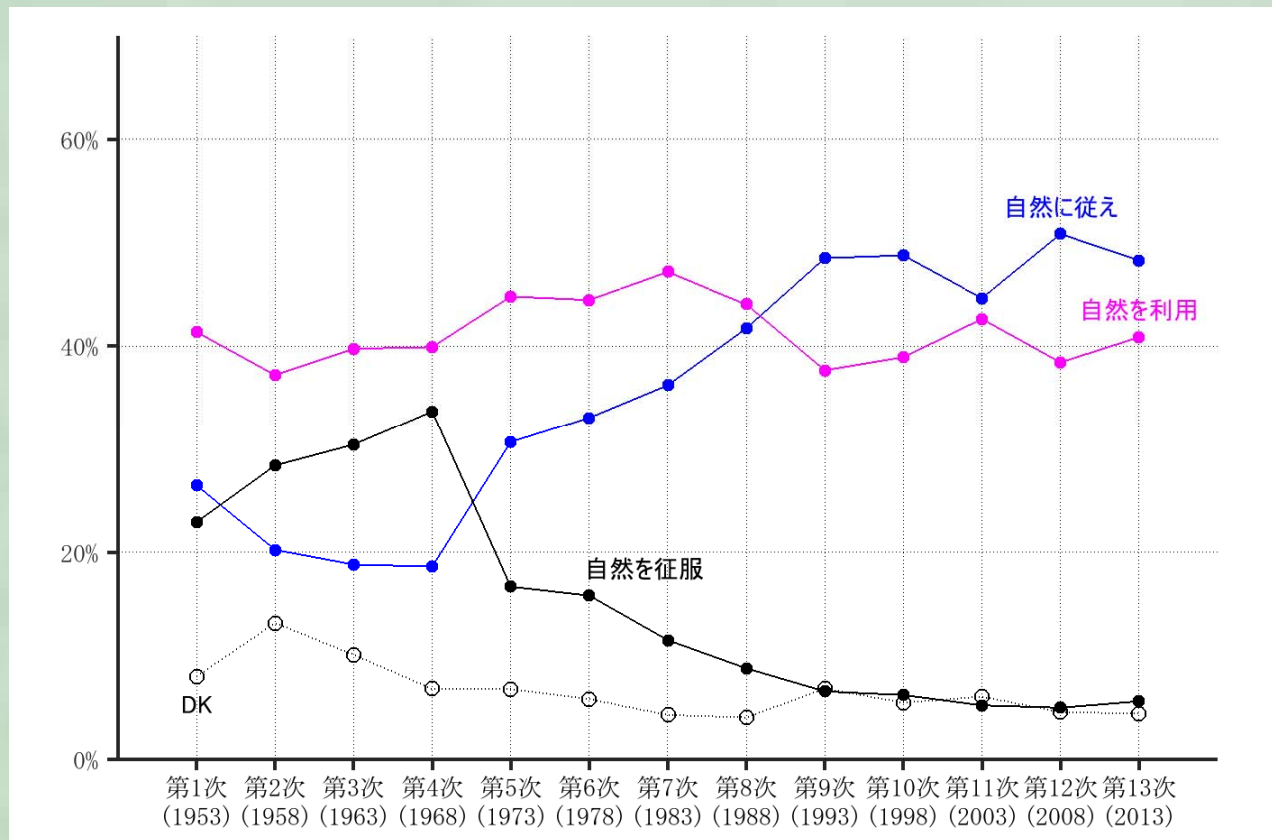
第2次(1958年)から第13次(2013年)へ

● 60年間で変化の大きい項目

1. #1.3 学歴(小学↓, 大学↑, 中学)
3. #2.5 自然と人間との関係(自然を征服↓, 自然に従え↑)
4. #8.6 選挙への関心(ほとんど投票しない↑, なにをおいても投票↓, あまり投票する気にならない↑)
5. #2.7 一番大切なもの(国家・社会↓, 家族↑, 金・財産↓, 家・先祖↓)
6. #4.10 他人の子供を養子にするか(つがせる↓, つがせない↑)
10. #2.4 暮らし方(清く正しく↓)
11. #9.6 日本人・西洋人の優劣(劣っている↓, すぐれている↑)
13. #4.5 子供に金は大切と教える(賛成↓)
17. #2.1 しきたりに従うか(場合による↑)

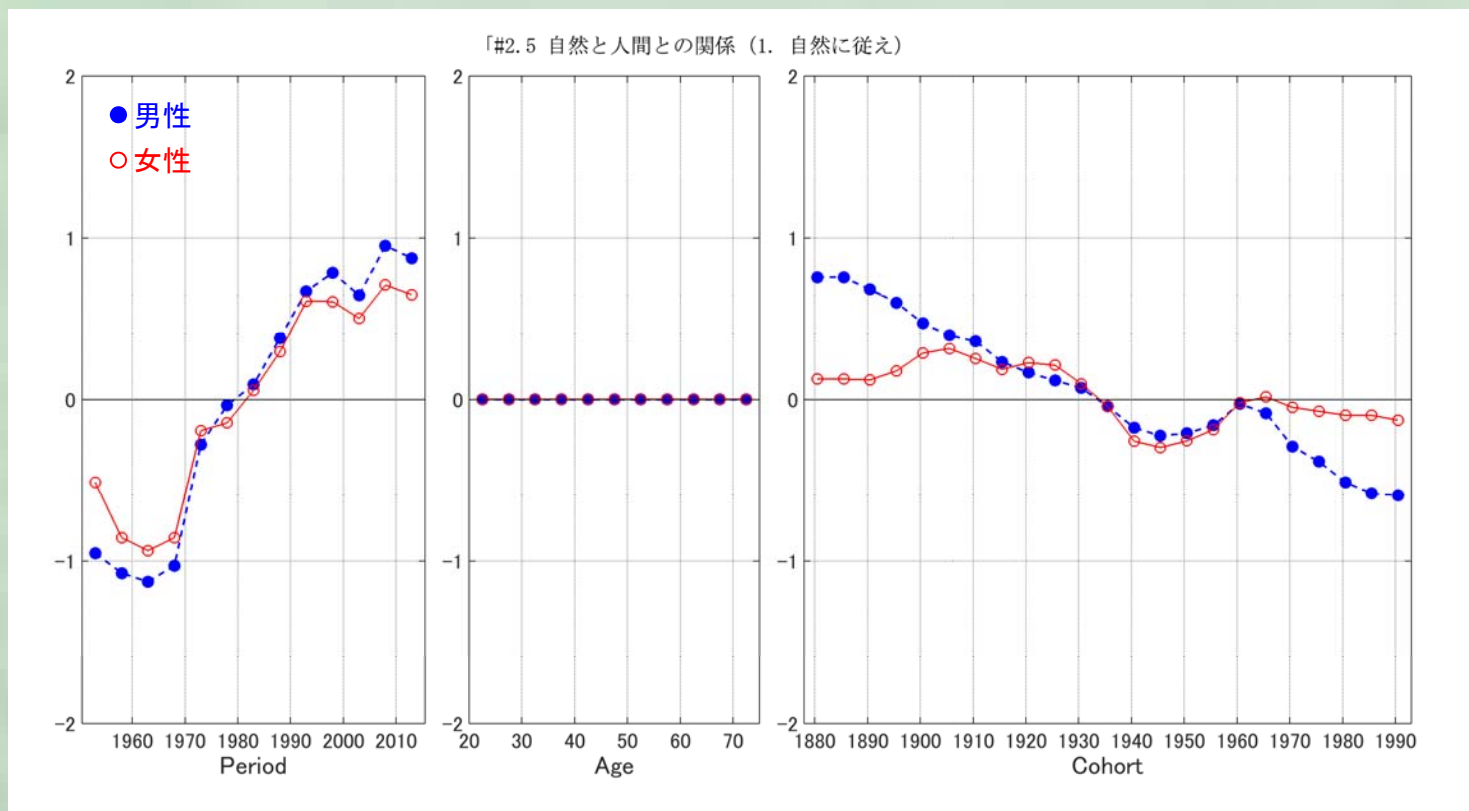
#2.5 自然と人間との関係

- ‘自然に従え’が、1973年に上昇し、‘自然を征服’を逆転し、以降上昇、1993年以降は安定傾向



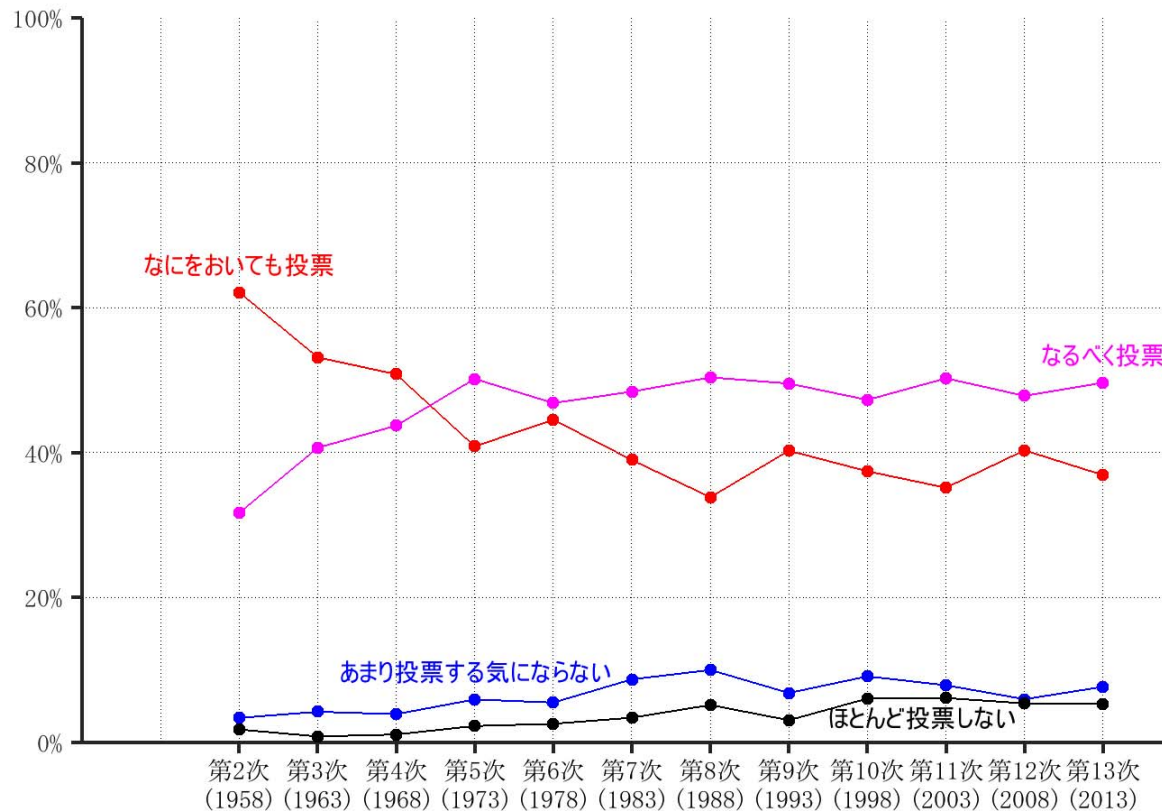
#2.5 自然と人間との関係(自然に従え)

- 時代効果が大. 年齢効果は認められず
 - 世代効果は, 1960年代生まれでいったん上昇したものの(特に男性は)減少傾向



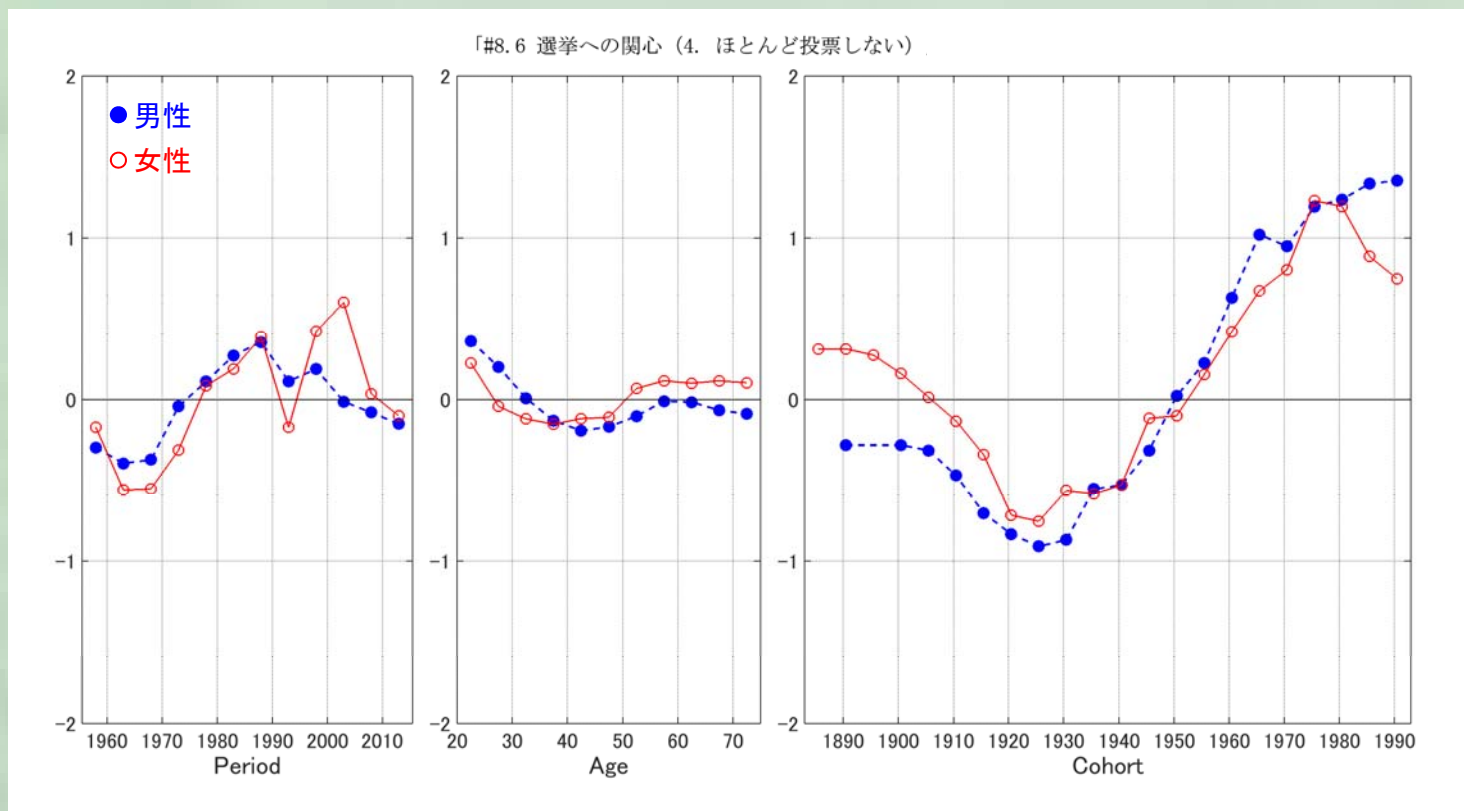
#8.6 選挙への関心

- ‘ほとんど投票しない’が、(%は低いが)1.6%(1973)から6.2%(2013)と3.8倍に増加
- ‘なるべく投票’は、1970年代まで増加、その後波を打つも横ばい傾向



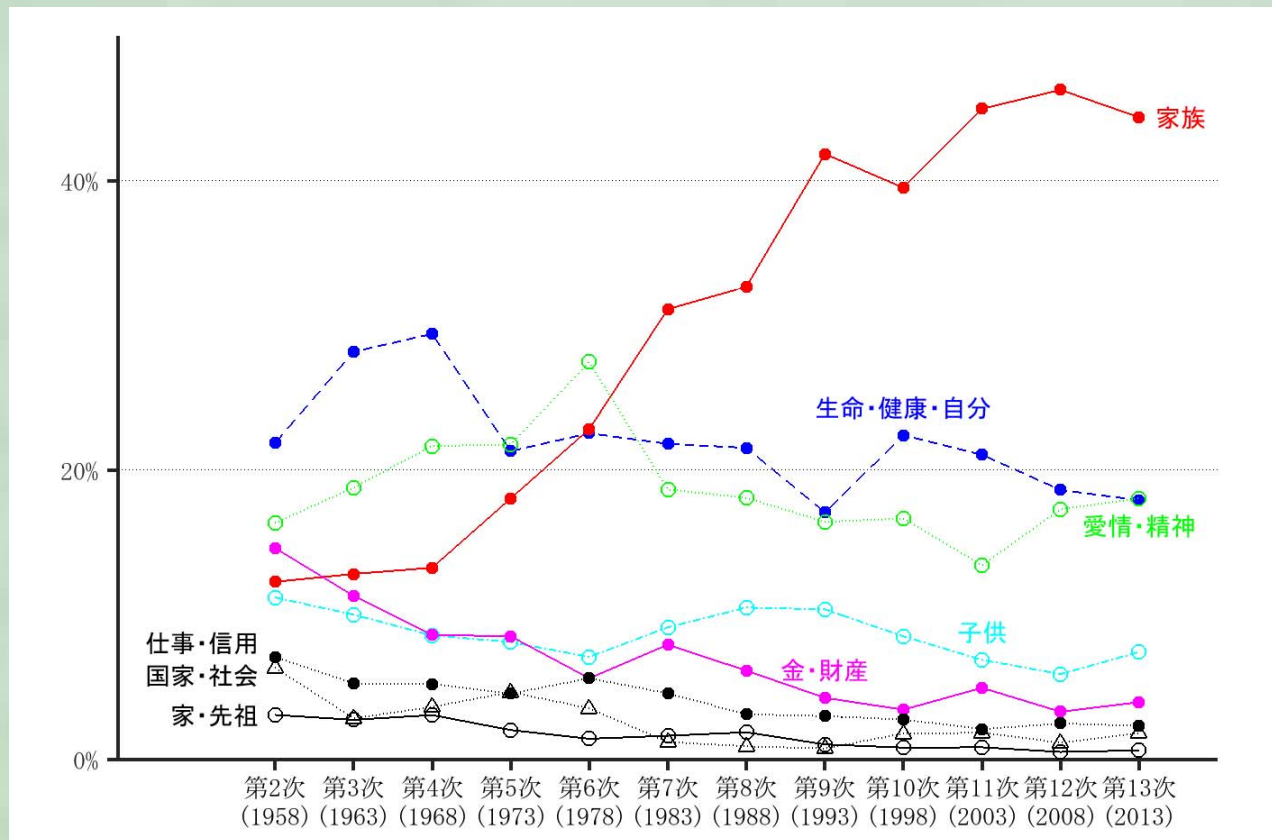
#8.6 選挙への関心(ほとんど投票しない)

- 世代効果が顕著で, 新しい世代ほど上昇
- 時代効果もある. 1990年代以降減少傾向
- 年齢効果は中年にかけて(ほとんど投票しないは)減少



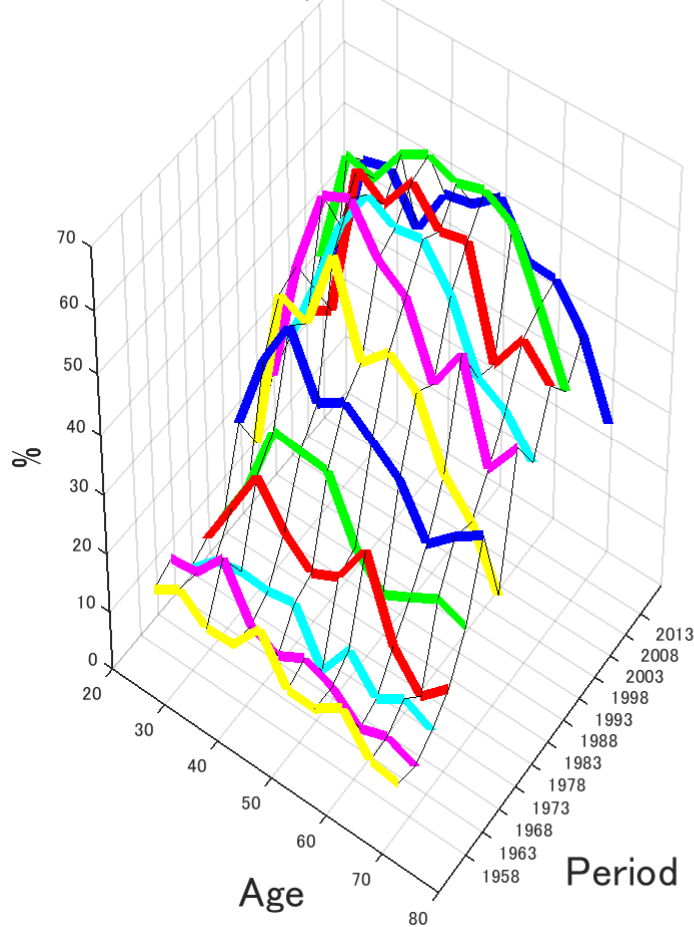
#2.7 一番大切なもの

- ‘家族’が、1973年に20%弱に上昇、以降2003年の50%近くまで上昇をつづけ、以降安定

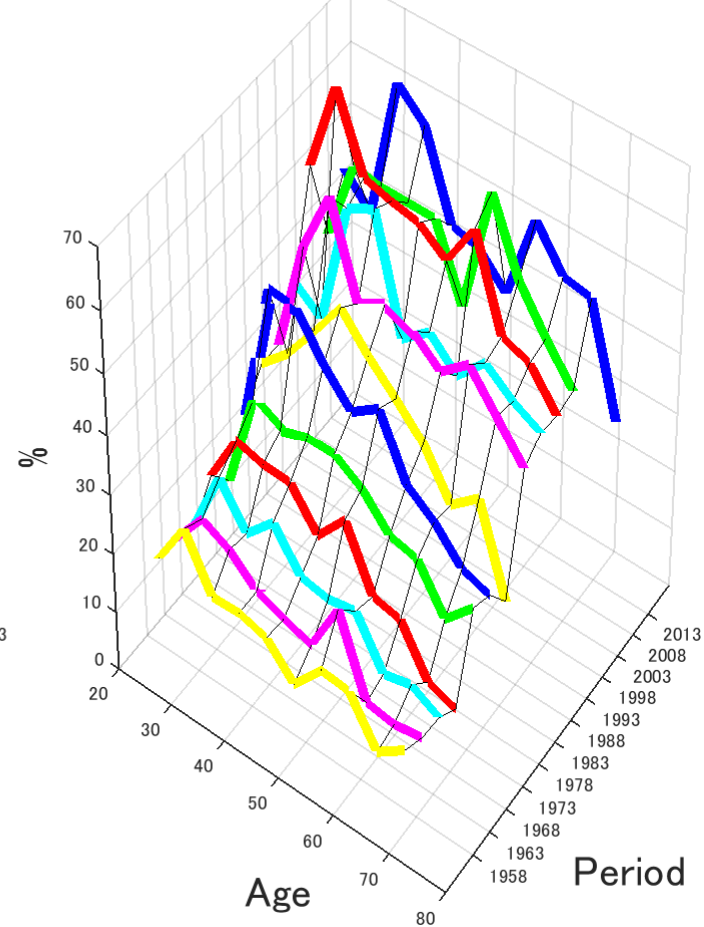


#2.7 一番大切なもの(家族)

[男性]

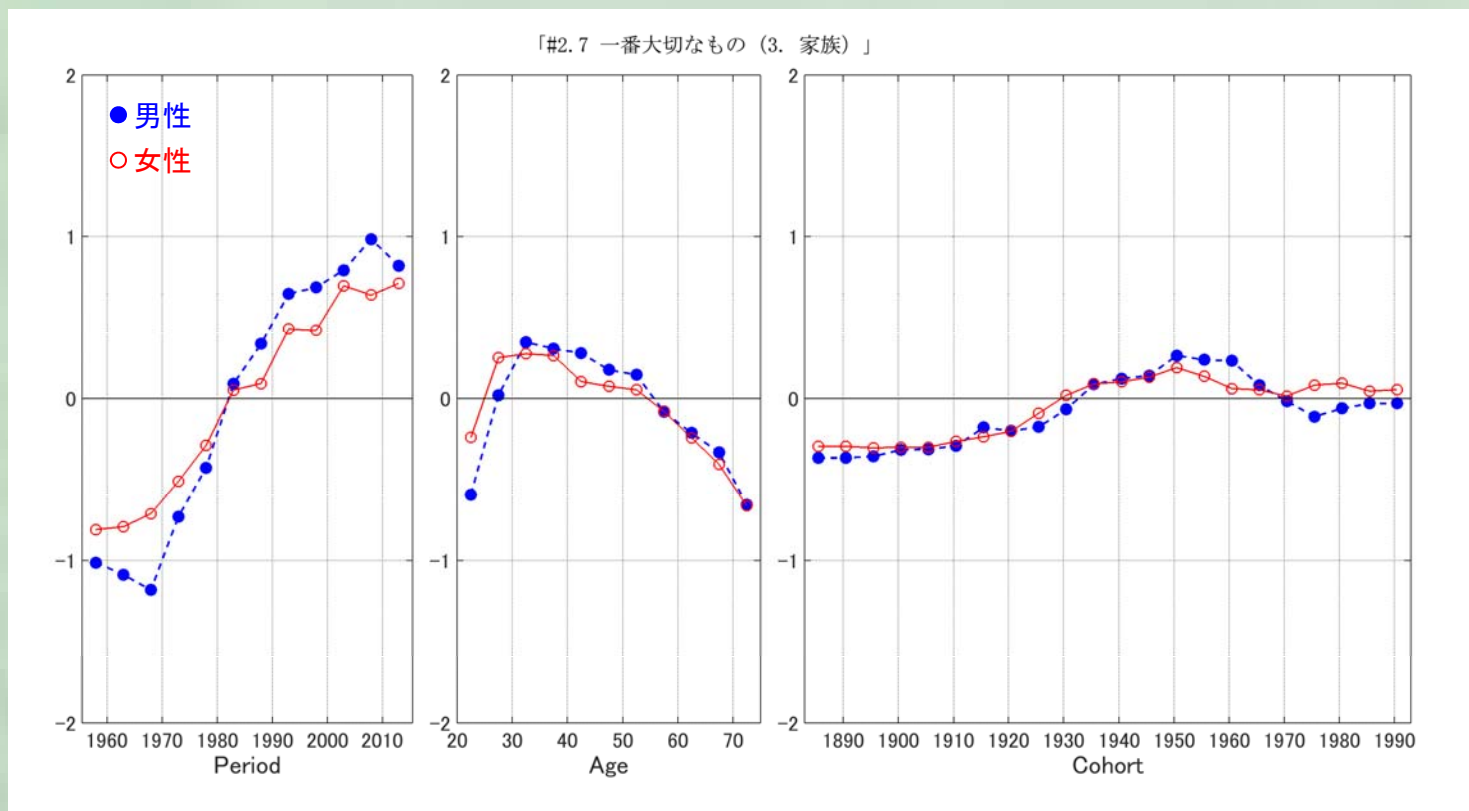


[女性]



#2.7 一番大切なもの(家族)

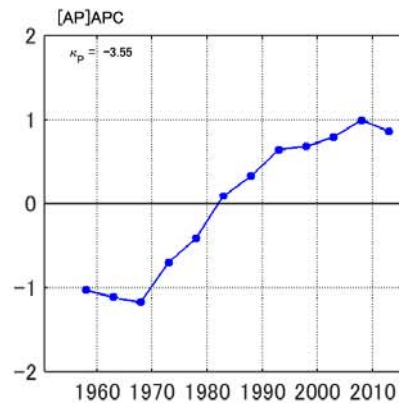
- 時代効果が顕著
- ライフステージに呼応した年齢効果
- 新しい世代の動向？



#2.7 一番大切なもの(家族)

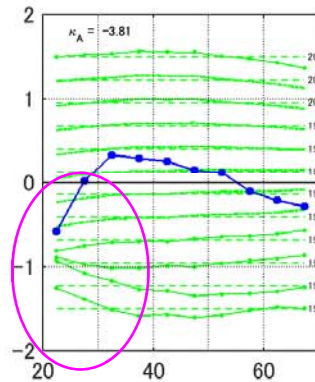
● コウホート分析結果(交互作用効果モデル)

[男性]

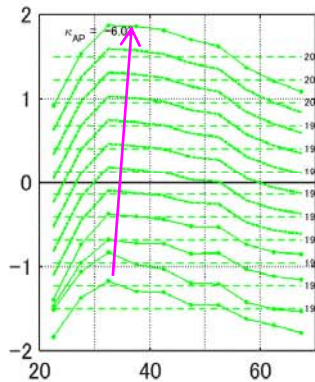


時代効果

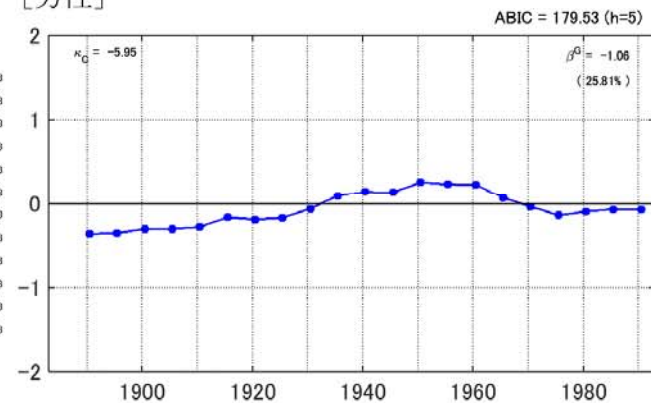
「#2.7 一番大切なもの (3. 家族)」 [男性]



年齢効果とAP効果

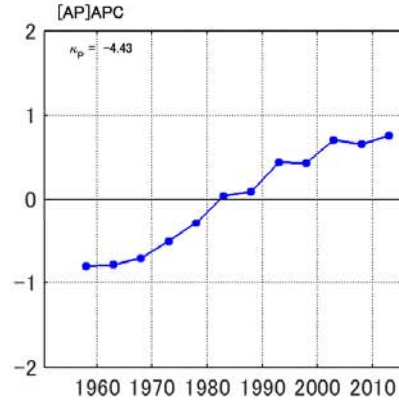


年齢効果+AP効果



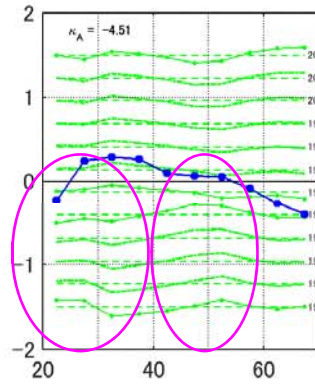
コウホート効果

[女性]

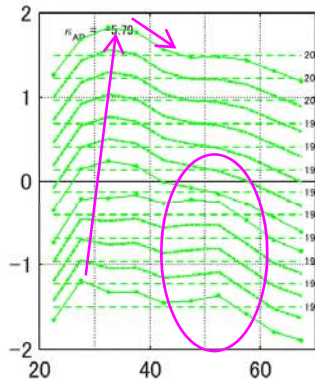


時代効果

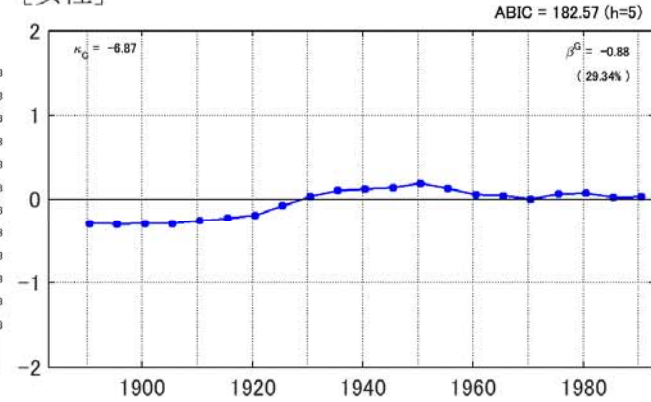
「#2.7 一番大切なもの (3. 家族)」 [女性]



年齢効果とAP効果



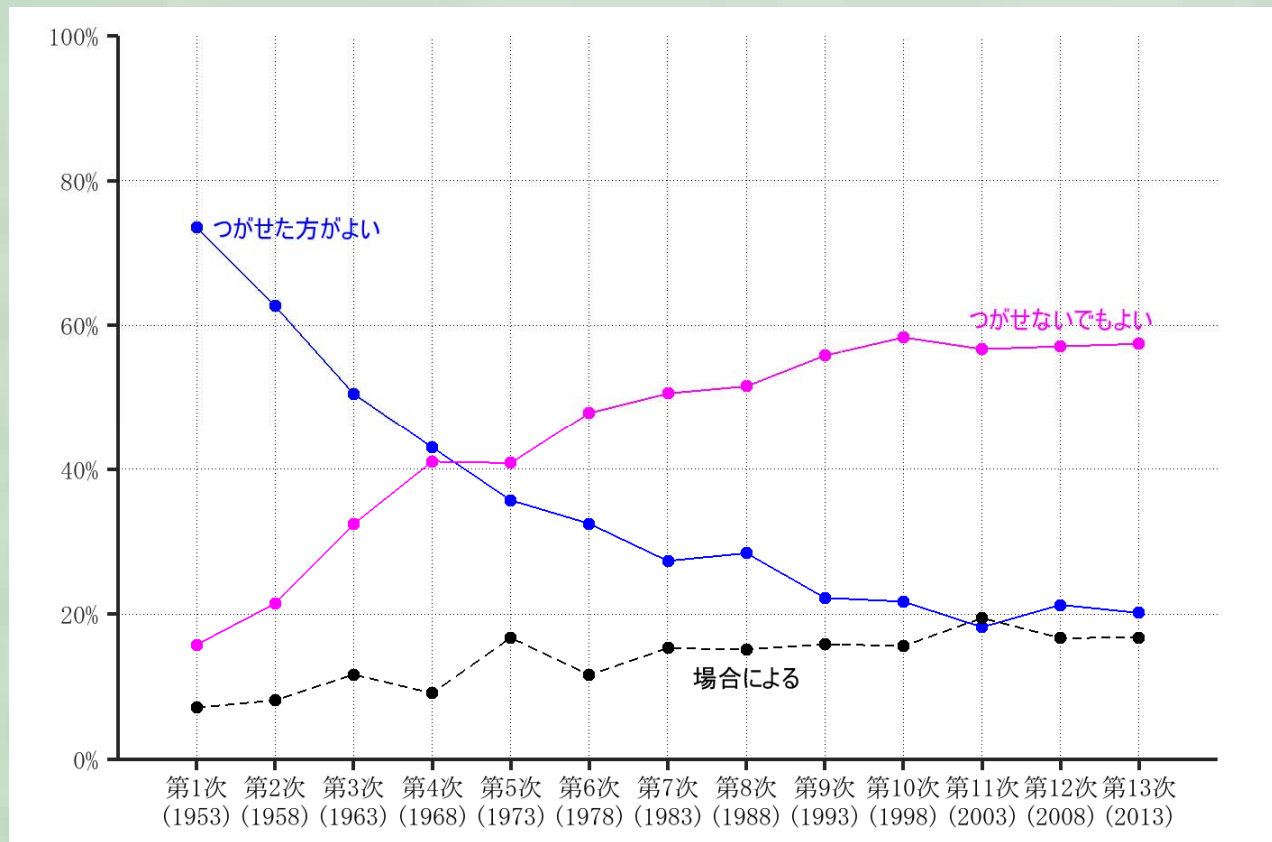
年齢効果+AP効果



コウホート効果

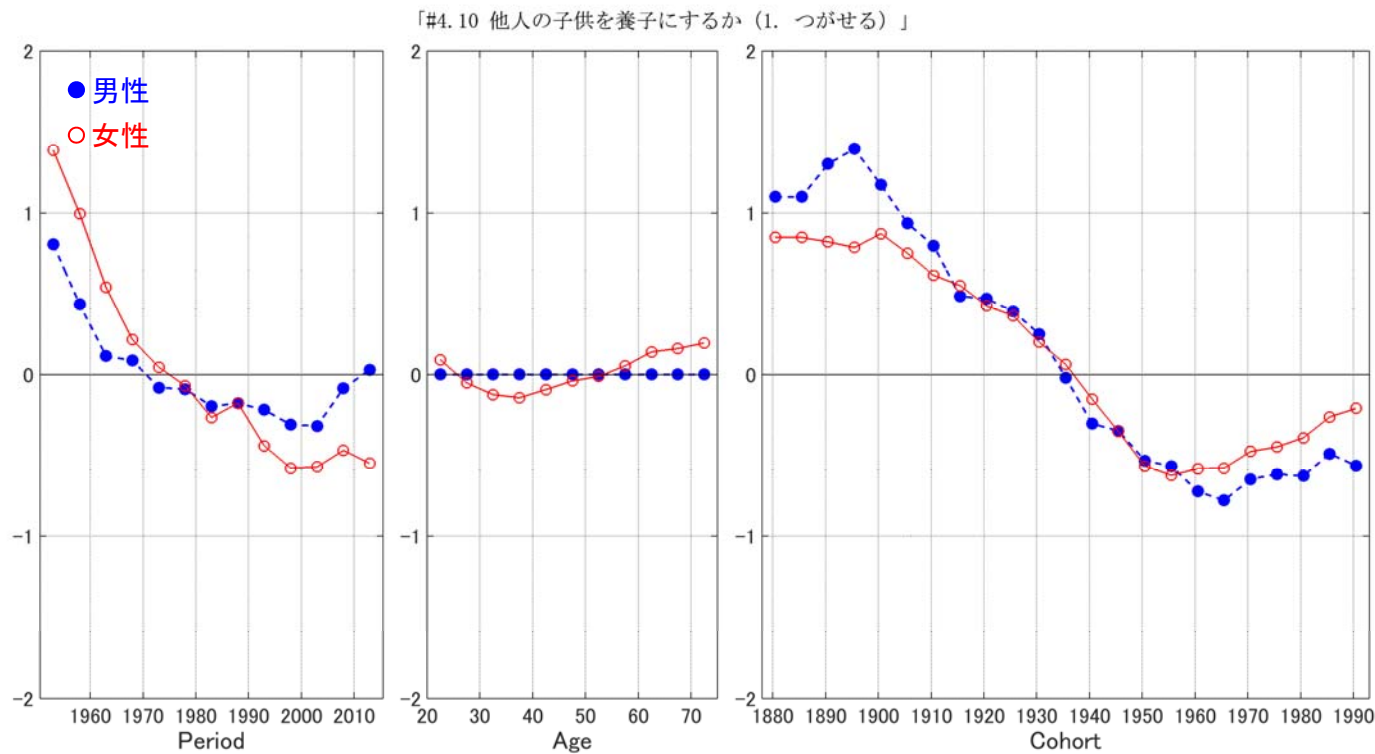
#4.10 他人の子供を養子にするか

- ‘つがせる’が、1953年の70%超から1993年以降は20%前後で安定



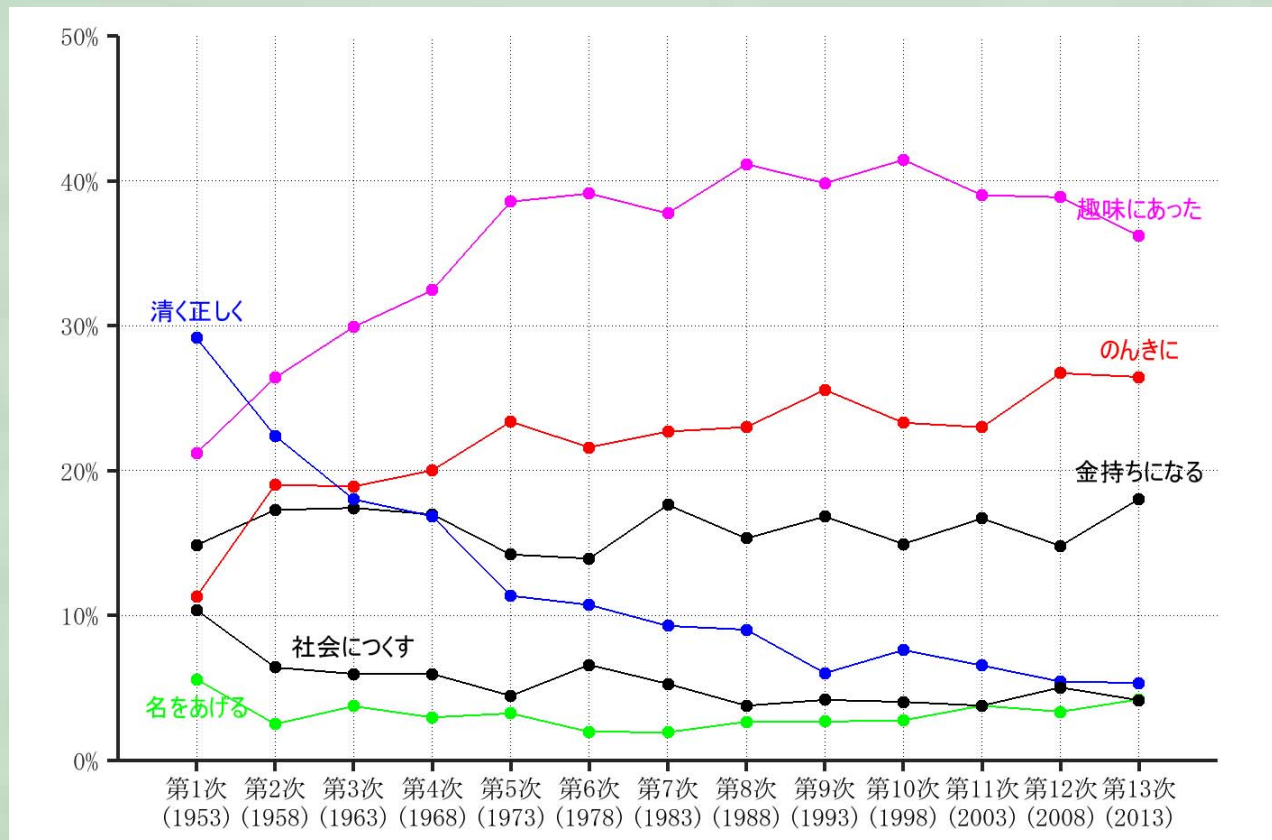
#4.10 他人の子供を(つがせる)

- 世代効果と時代効果が大きい
 - 近年の男性の時代効果の上昇？
 - 女性の新しい世代の上昇傾向？



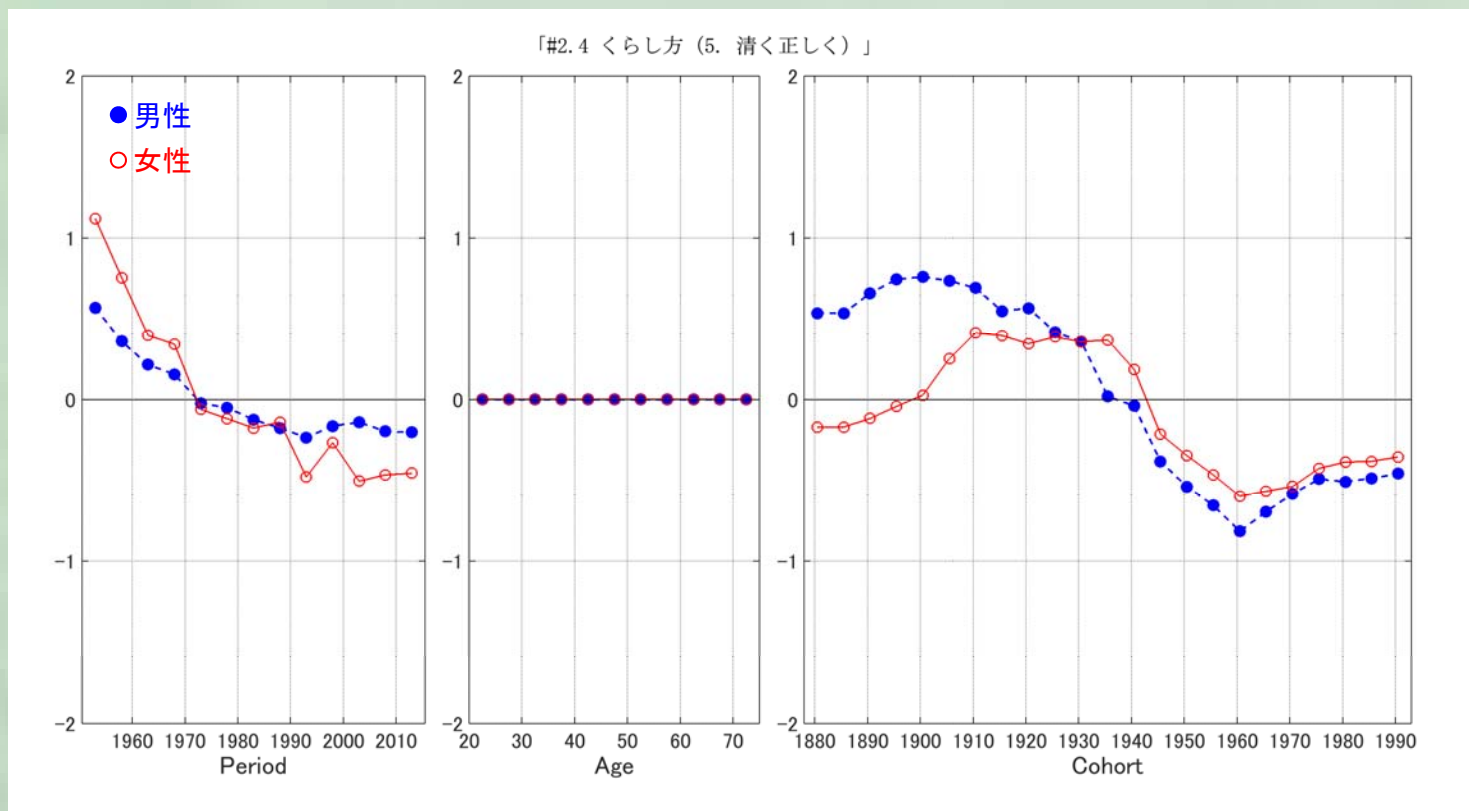
#2.4 くらし方

- ‘清く正しく’ の大幅な減少
- ‘趣味’ の増加. 1973年以降の安定と, 近年の陰り
- ‘のんきに’ のゆるやかな上昇



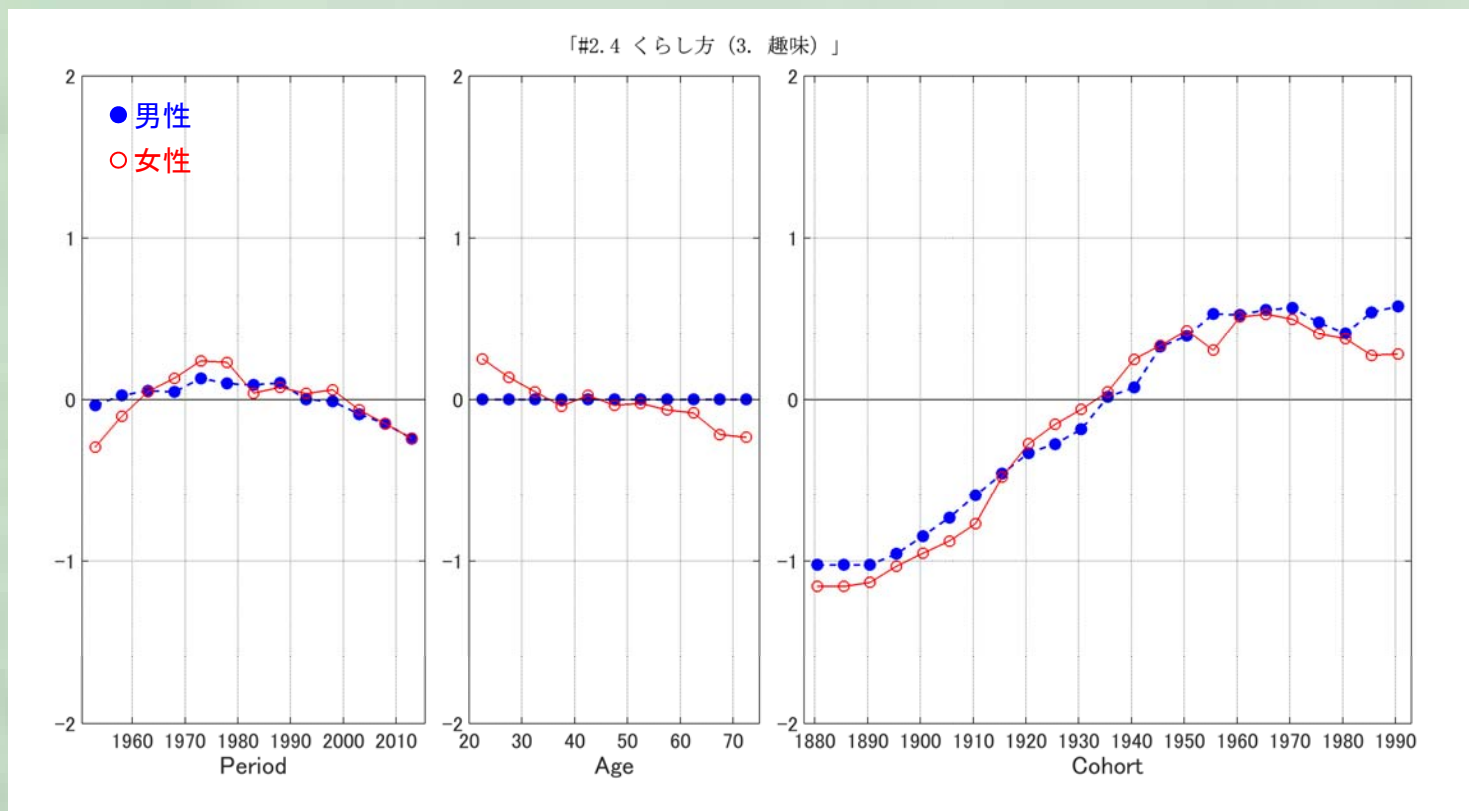
#2.4 くらし方(清く正しく)

- 世代効果と時代効果
- 年齢効果は認められず
- 新しい世代の動向？



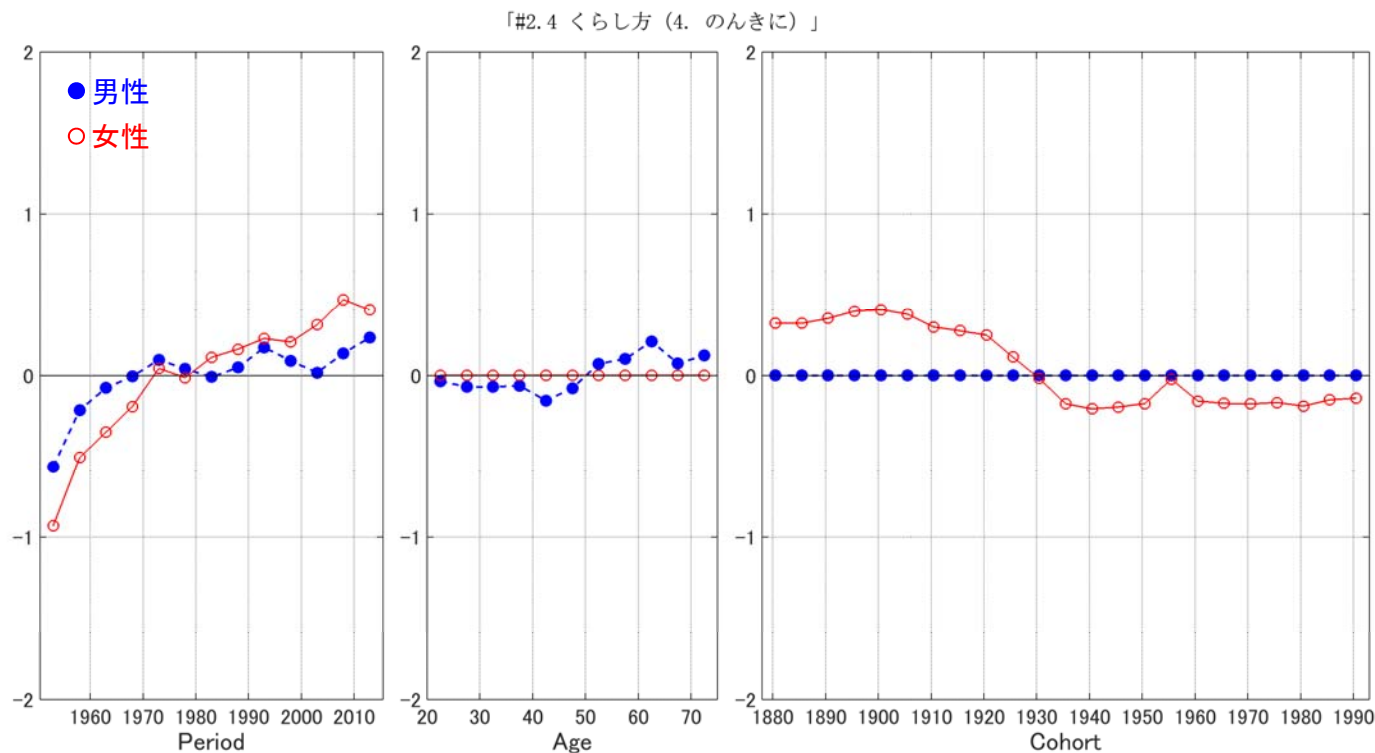
#2.4 くらし方(趣味)

- 世代効果が顕著
- 時代効果の1990年代以降の漸減傾向あり



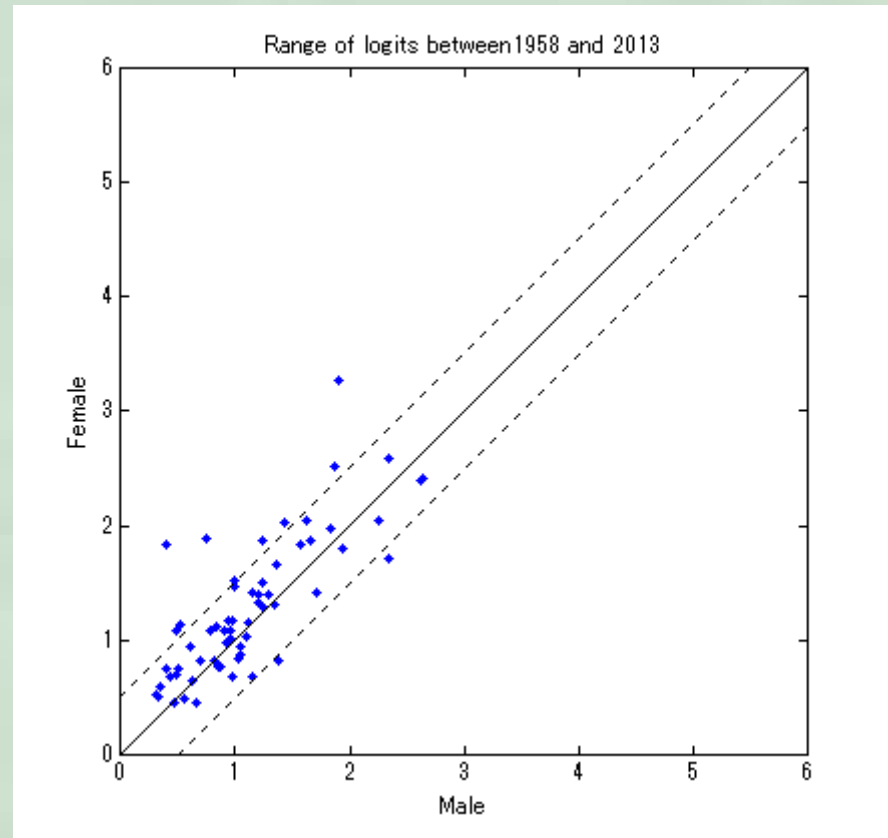
#2.4 暮らし方(のんきに)

- 時代効果に増加傾向. より女性に
- 男性は年齢効果.
- 女性は世代効果. 1940年代以降生まれは低く推移



1958から2013へ 男女による違い

- 同じ項目（回答選択肢）について，男性の割合のロジットのレンジと，女性のそれとを対比
 - － 破線の外側はロジット尺度で0.6以上の差あり

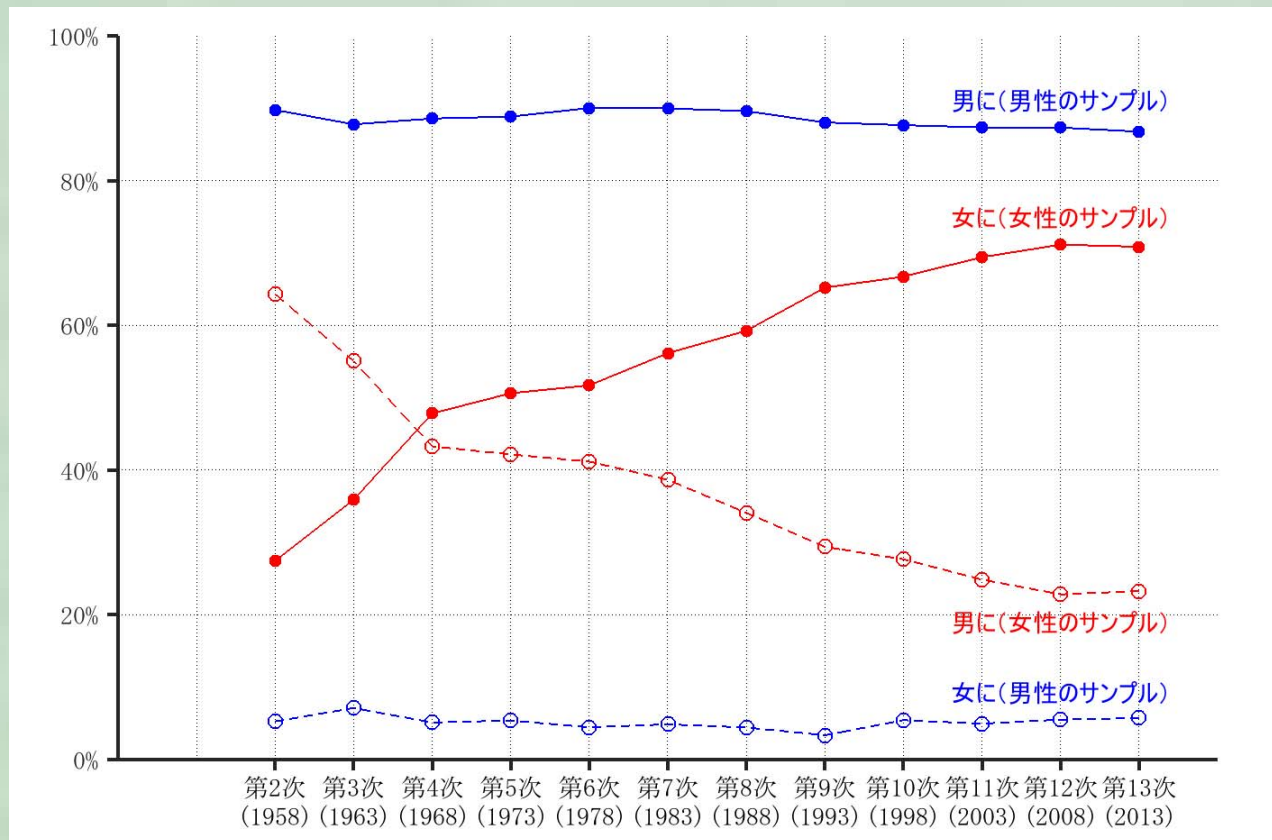


第2次(1958年)から第13次(2013年)へ

- 男性の変化の方が大きい項目
 1. #2.7 一番大切なもの(家族↑)
 2. #4.11 先祖を尊ぶか(尊ばない方↑)
- 女性の変化の方が大きい項目
 1. #6.2 男・女の生まれかわり(男に↓, 女に↑)
 2. #1.3 学歴(大学↑, 小学↓)
 3. #4.10 他人の子供を養子にするか(つがせる↓, つがせない↑)
 4. #2.1 しきたりに従うか(場合による↑)
 5. #2.4 暮らし方(名を上げる↑)
 6. #2.7 日本と個人の幸福(日本→個人↓)
 7. #4.4 先生が悪いことをした(そんなことはないという↓)

#6.2 男・女の生まれかわり

- 女性の‘女に’が、1953年の3割から2000年代の7割まで上昇。男性は変わらず



1-ii.

第5次 (1973年)

から

第13次 (2013年)

へ

第5次(1973年)から第13次(2013年)へ

- 第13次(2013年)調査で質問した継続調査項目
 - K票, M票あわせて83項目(255選択肢)
- かつ, 第5次(1973年)以降に質問している項目
 - 43項目, その他・DKを除く131回答選択肢
 - (内, 第2次(1958年)以降は, 20項目, 63回答選択肢)
- 全体, 男性, 女性についての時系列推移について
 - 割合のロジットの“レンジ”で変化の幅を把握

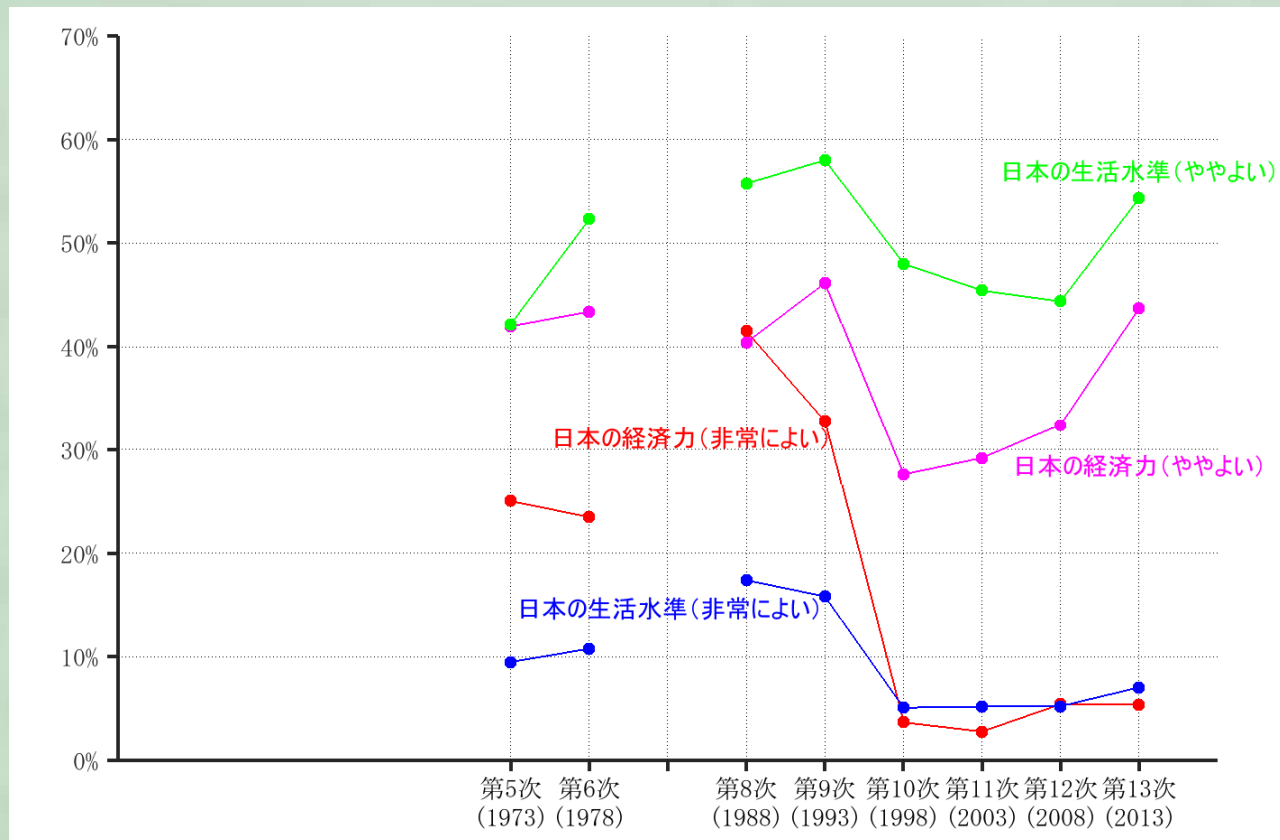
第5次(1973年)から第13次(2013年)へ

● 40年間で変化の大きい項目

1. #1.3 学歴(小学↓, 大学↑, 中学↓)
2. #9.12c 日本の経済力(非常によい↑, 非常にわるい↓, ややわるい↓)
5. #2.7 一番大切なもの(国家・社会↓)
6. #7.18d 生活は豊かになるか(豊かに↓)
8. #7.18 人間の健康の面はよくなるか(よくなる↓)
9. #6.2d 楽しみどちらが多いか(女が多い↑)
10. #9.12d 日本の生活水準(非常にわるい↓)
11. #2.3c 家庭に満足か(不満↓)
12. #9.12e 日本の心の豊かさ(非常によい↓)
13. #9.12 日本の科学技術の水準(非常にわるい↓)

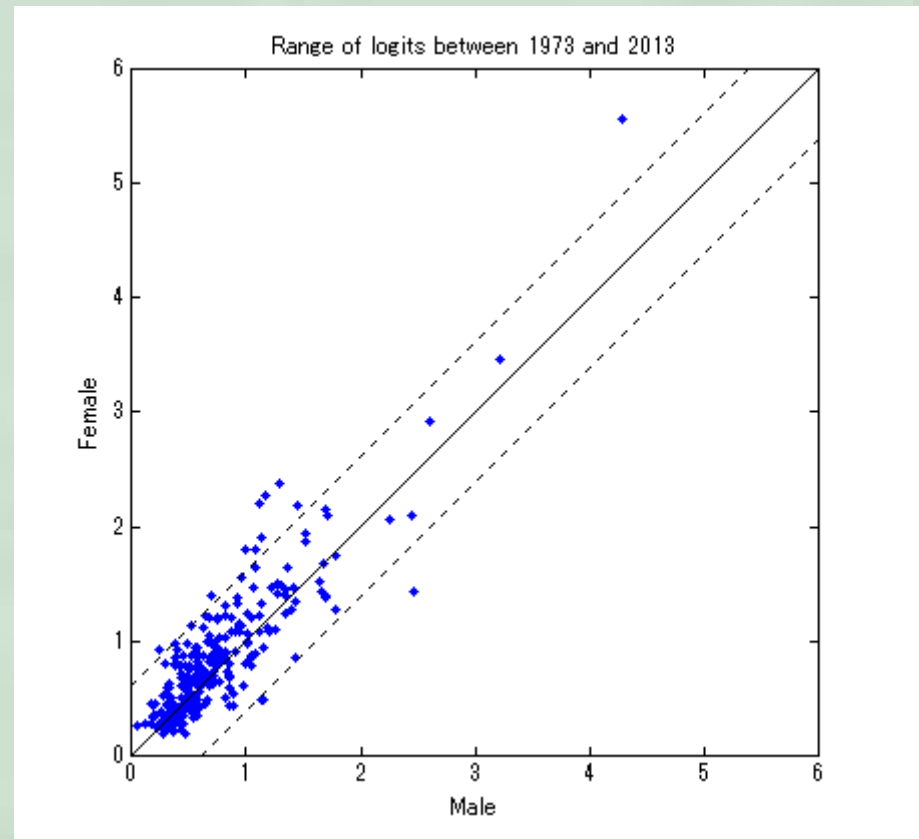
#9.12c, d 日本の経済力・生活水準

- 1973年以降の項目
- 1993年から1998年への落差が大きい
- 2013年へ、‘ややよい’は回復も、‘非常によい’は停滞のまま



1973から2013へ 男女による違い

- 同じ項目（回答選択肢）について，男性の割合のロジットのレンジと，女性のそれとを対比
 - － 破線の外側はロジット尺度で0.6以上の差あり



第5次(1973年)から第13次(2013年)へ

- 男性の変化の方が大きい項目
 5. #2.7 一番大切なもの(子供↓)
 6. #6.2c 苦労どちらが多いか(男が多い↓)
- 女性の変化の方が大きい項目
 1. #1.3 学歴(小学↓, 大学↑)
 2. #9.12e 日本の心の豊かさ(非常によい↓)
 3. #9.12d 日本の生活水準(非常によい↓)
 4. #6.2d 楽しみどちらが多いか(男が多い↓, 女が多い↑)
 5. #2.4 暮らし方(名をあげる↑)
 6. #8.6 選挙への関心(ほとんど投票しない↑)
 7. #9.12c 日本の経済力(ややよい↓)
 8. #6.2 男・女の生まれかわり(男に↓, 女に↑)

2-i.

第11次 (2003年)

から

第13次 (2013年)

へ

第11次(2003年)から第13次(2013年)へ

- 第13次(2013年)調査で質問した継続調査項目
 - K票, M票あわせて83項目(255選択肢)
- 第11次(2003年)以降に質問している項目は上と同じ
 - 83項目, その他・DKを除く255回答選択肢
 - (内, 第5次(1973年)以降は, 43項目, 131回答選択肢)
 - (内, 第2次(1958年)以降は, 20項目, 63回答選択肢)
- 全体, 男性, 女性についての時系列推移について
 - 割合のロジットの“レンジ”で変化の幅を把握

第11次(2003年)から第13次(2013年)へ

- 10年間で変化の大きい項目 (いずれかの選択肢が)
 1. #1.3 学歴(小学↓)
 2. #7.29 暮らしむき(非常に豊か↑)
 3. #7.40 社会は公平か(公平だ↑)
 4. #7.18 人間の健康の面はよくなるか(よくなる↑, わるくなる↓)
 5. #9.12e 日本の心の豊かさ(非常にわるい↓, 非常によい↑, ややよい↑)
 6. #9.12c 日本の経済力(非常にわるい↓, 非常によい↑)
 7. #1.8 帰属階層(上↑)
 9. #9.12d 日本の生活水準(非常にわるい↓)
 12. #7.18d 生活は豊かになるか(豊かに↑, 貧しく↓)
 13. #7.18e 幸福になるか(幸福に↑)

第11次(2003年)から第13次(2013年)へ

● 男性の変化の方が大きい項目

1. #7.29 暮らしむき(非常に豊か↑)
2. #2.3c 家庭に満足か(不満↓)
3. #2.3k 健康状態に満足か(不満↓)
4. #2.3j 余暇に満足か(不満↓)

● 女性の変化の方が大きい項目

1. #7.40 社会は公平か(公平だ↑)
2. #1.3 学歴(小学↓)
2. #1.8 帰属階層(上↑)
3. #2.30g 不安感:原子力施設の事故(まったく感じない↓)
4. #7.18d 生活は豊かになるか(豊かに↑)
5. #9.12d 日本の生活水準(非常にわるい↓)
6. #2.7 一番大切なもの(国家・社会↓)
7. #7.18 人間の健康面はよくなるか(よくなる↑)
8. #9.12b 日本の芸術(非常によい↑)

2-ii.

第12次 (2008年)

から

第13次 (2013年)

へ

第12次(2008年)から第13次(2013年)へ

● この5年間で変化の大きい項目

1. #9.12e 日本の心の豊かさ(非常にわるい↓, 非常によい↑, ややよい↑)
2. #9.12c 日本の経済力(非常にわるい↓)
3. #9.12d 日本の生活水準(非常にわるい↓)
4. #7.18d 生活は豊かになるか(豊かに↑, 貧しく↓)
8. #7.18 人間の健康の面はよくなるか(よくなる↑, わるくなる↓)
10. #2.30g **不安感:原子力施設の事故(非常に感じる↑, まったく感じない↓)**
12. #7.29 **くらしむき(非常に貧しい↓)**
13. #2.30g **不安感:経済面の不安(非常に感じる↓)**
14. #2.3d **社会に満足か(不満↓)**

第12次(2008年)から第13次(2013年)へ

- 男性の変化の方が大きい項目
- 女性の変化の方が大きい項目
 1. #2.30e 不安感:失業(非常に感じる↓)
 2. #2.30g 不安感:原子力施設の事故(まったく感じない↓)
 3. #7.18b 心のやすらかさはますか(ます↑)
 4. #7.18d 生活は豊かになるか(豊かに↑)
 5. #7.18e 幸福になるか(幸福に↑)
 6. #7.35 環境の保護は重要か(重要ではない↑)
 7. #9.12 日本の科学技術の水準(非常にわるい↑)
 8. #9.12c 日本の経済力(非常にわるい↓)
 2. #9.12d 日本の生活水準(非常にわるい↓)

まとめ

- 変化する項目（登場人物たち）の変遷を見てきた
 - 調査項目の世代交代！
- 意識の転換期は20年ごとにやってくる？
 - 第5次(1973年)調査
 - 高度成長期の終焉
 - 第9次(1993年)調査
 - バブルの崩壊
 - 第13次(2013年)調査
 - 東日本大震災後

おわりに

● 「歴史の巨大な曲がり角」

世代が消滅し 減りゆく環境資源 成長の限界迫る

－ 社会学者 見田宗介さん インタビュー

(朝日新聞, 2015年5月19日朝刊)

- 「かつて、日本人は生まれた年代ごとに明確に違う意識を持っていた。」
- 「戦中世代, 戦後世代, 団塊世代, 新人類と, それぞれの世代に名前が付いていた」
- 「新人類世代以降は差がなくなってきた。」
- 「独自の世代名もなく『団塊ジュニア』『新人類ジュニア』などと呼ばれて」
- 「世代間で意識が違うのは, 青少年期の体験が大きく異なるから」
- 「戦争中に若者だった世代と, 戦争体験のない団塊の世代とでは, 価値観が違う」
- 「人々の生活を, 根こそぎ変えるような巨大な変動が少なくなり, 歴史の流れがスローダウンしている。」
- 「世代の消滅はその反映」